

ひます……が僕は至急取調べたいと思ひますが、それに到るべき第一に立てる點は、何處から拳銃が發射されたかと云ふ事を、確定する事であらうと思ひます……」

『奈何して確定するのだ？』

『え、夫れは容易い事です……、ね、ジュエヴさん、第一の彈丸はジョゼフインの護謨蒲團を貫通して、床板に棲つたのでせう？ で此の彈丸の通過點即ち床板に打込まれた跡と、蒲團を打貫いた跡とに假定線を當て、其の假定線を引延して行くと、此處に發射點の方向が確實に發見せられます……』

見物の群の中から一醫師が進み出た。

『ジュエヴさん、貴方の論法で行くと、彈丸は助手室に行くあの扉口の開口から放たれたものと歸結する事が出来ませうよ！』

頭も擡げないで聞いてゐたジュエヴは、其の聲に聞き覚えがあると思つた。

『あ、貴方ですか、シャレックさん！ お目にかゝれて喜ばしく思ひます！

……成程、さうですね、貴方の仰有る通りです、惡漢が病人を狙つたのは彼處です……これに異議がありますか？』

シャレックは斷定するやうに頭を振つた。

『私は丁度私が此の室へ這入つて二秒も経たぬのにあの發砲です……私は人の來る氣勢を聞きませんでした。少くも私の後からは誰も來なかつたのですよ、私の前にも誰も歩いてゐませんでした……そこで惡漢が他の扉口から、即ち病室を通り抜けて彼處迄來たものと奈何してする事が出来ませう、誰も這入つて來のを見た者も無く、逃げた者も無いではありませんか？』

ジュエヴはその言葉に答へるのに、唯不可解だと云ふ顔付をするばかりであ

つた。

『私には解釋がつきません、調べます……』

そして又もや看護人達の間を通つて、ジューヴは患者のゐる大廣間と助手室とを通じてゐると云ふ其の扉口に歩き寄つた……彼の後には多勢の人達が探偵長の求める物が解らずに心配さうにな顔をして跟いて來た。

けれどもジューヴは自分の行動に信賴するもの、如く扉を開けた。

『發射せられたのは此處からだ！』と彼は斷言した。

探偵は何やら拾はふとして腰を屈めながら揚々たる調子で言つた。

『けれども私の斷定を確實にするものが此處にあります……』

そしてジューヴは欣然として一挺の拳銃をさし出した。彼が直ちにそれを検査すると、彈丸がまだ四發残つてゐた。

『立派な徴證です！』

と言つてジューヴは更に尋ねた。

『他所の人で、つまり見舞人で此の扉口から病室へ確かに通つた者がありませんか？』

『決してありません！家の者、病院内を知つてゐる者、實驗室を通つて此の室へ出る事を知つてゐる者しかありません……外科室も通らなければならぬのです！……』と助手が言下に答へた。

『ではルパールは病院に知つた人でもあるのですか？』

『決してありません、僕等は貴方から寫真を見せて貰つてゐますから、解るだらうと思ひます！』

『事實は逆だ。問題を約めて言ふと、ルパールは私も貴方がたにも知られて

ゐながら、私にも貴方がたにも見咎められずに這入つて來たのだ……病院の入りで無ければ解らぬ道を取つて來たのだ……」

「それに給仕達が今助手の實驗室を片附て居りますから、誰か見知らぬ人を見れば、何しに來たんだと尋ねませうしね……」とシヤレツクも言つた。

「それぢや益々解らなくなつて了ひますね！ 惡漢がもう一方の扉口には見張がついてゐるかも知れないと思つたので、好んで此の扉口を撰んだものとするには、其の道を通るのに變装をして通らねばならなからうと思ひます……」

探偵はさう話をしてゐる間、病室の扉口にゐたが、やがて一臺の寢臺の裾の方に腰かけて、手に持つてゐた拳銃を機械的に片傍へおいた……

がまだそれから手を放し切らないうちに突然
「や、ッ！……」と叫びざま躍り上つて、夜具の上に今置いた拳銃の筒口程の

小さな赤い汚點のついてゐるのを指示した……

「これで判然と解りました！」

一同は不思議さうな顔をしてジュージツ探偵を見守つた。

「ねえ、諸君、論理的に見給へ！ 私が此の白い夜具の上に拳銃を置いたら、

血の痕がつかまりました……薄くはありますけれど、紛れもない血です……これか

ら何が歸結されませう？」

誰も口を出す者は無かつた……

「さうです、私は今發射した犯人は、拳銃を使ふ者なら誰でも知つてゐる法を

用ひたのだと歸結します……奴は狙つてゐる暇が無かつた、が打損じたくなか

つた……そこで奈何して狙を定めたか、それが此の結果に現はれて居ります……

……彼奴は自分で自分の人指指を傷したのです……」

ジューヴは言葉に仕方を添へて、右手に拳銃を取ると銃床尾を指で握り、引き金に中指を懸け、人指指を銃身に添ふて伸した。

「犯人はかうして發砲したのです。指を筒口に伸して、直ちに撃たうと思ふ女を指ざしたのです……かうすれば殆どどうでも正確に狙へるものです……所が不幸にも、吾々には寧ろ幸ひですが、此の拳銃の銃身が短かゝつたので、犯人の指頭が筒口より先に出てゐたために、彈丸が發射する時指を掠つて飛び出したのです！ 其の時の傷の血が、今拳銃を置いた時に、夜具についたのです……」

シヤレツク醫師が進み出た。

「で貴方は奈何結論なさるのですか？」

「犯人は指に必ず傷をして居ります。病院の人のの中に、又今病院の中にゐる全

部の人の中にも、人指指に少しの傷でもある人が居るなれば、其れが犯人であると思ふのです！……」

探偵の断定は確實で明瞭だつた。犯人を見分ける爲めに發見した此の名方法に一同は啞然とした。

「併し」と助手が一寸熟考して、眞面目な反對を唱へようとした「併し貴方、此所の人が此の扉口から病室へ這入つては來られないと云ふ事と、ルパールが病院の人に關係も無ければ、寫真を見てゐるのだから誰にも彼奴を見分けられない事は無いと云ふ所論を、それで破る事は出來なからうと思ひますか？……」併しジューヴは其の様な取るに足らぬやうな事に閉口たれなかつた。

「君は不確實な事に囚はれないで、確實な事實を信じなければならぬと云ふ事を忘れてゐるのだ。誰かジョゼフインを撃つた者がある……それは論ずる迄も

無い事だ。誰が撃つたのか？ それは解らない……ルパールだと信じてはゐるが、まあ聞き給へ、それは單に信ずるだけだ……それには給仕か、看護婦か、見舞客か！ 或は諸君も私も知らぬ共犯者がありはしないだらうか？』

今度は誰も答へなかつた、ジュエヴは立上つて冷然として言つた。

『諸君、私は院長さんにお目にかゝつて、全病院の人を私の前に並んで頂く様に命じて下さる様お願ひして参ります……私の部下は今朝命じておいた訓令通り、今、犯罪が起ると同時に、何事を問はず、門や、他の扉口々に馳けつけて、閉鎖して了つた筈です。だから誰も出ては行きません……長くて二時間のうちには、犯人を搜索して捕縛する事が出来ようと思ひます！……』

ジョゼフインを狙撃した悪漢を捕へようとしてジュエヴの案出した方法は、

確實に殺人犯人を發見しなければならぬ筈だ。探偵の判断は否定すべからざる論理で確定された、そして拳銃の筒口に發見された血痕から、直ちに引出した演繹は、あらゆる點に於て此の名探偵が此れ迄多くの事件に遭遇して實證してゐる非凡な天賦に相當するものであつた。

不幸にして此の方法は、好い事は好かつたけれども、非常に複雑してゐた。病院は一世界だ。其處に雇はれてゐる人は百人どころでは無い。一方から見ると、ラリボアジュールの使用人ばかりではなく、男も女も、看護人も研究生も病人もまた訪問者迄、犯罪の行はれた時に病院内にゐた者を悉く検査しなければならなかつたのである……

明哲な頭腦で以て、ジュエヴは直ちにラリボアジュールに恰も囚人の様に閉ぢ込められた人々を悉く取調べて、其の中から人指指に傷のついた男を發見

しようど企だてたけれども、それでは其の検査が長くかゝらざるを得なかつた。ジューヴが管理室に立籠つて、其の物々しい仕事に取かゝつてから早や既に二時間経つたが、怪しいと思はれる者も、自分の前に怪犯人があると思ひ得られるやうな者も發見せられなかつた。

犯罪は三時に行はれた、ジューヴの検査を無事通過した者達は、歸つても好いと云ふ許可を得てぞろと歸り出した。

シヤレツク醫師はのろ／＼した歩調で出口へ來た、彼は毎晩其處から病院を出て家へ歸るのであつた。

彼は氣を腐らせてゐた。

數日前家財を泥棒せられた上に、奇怪な屍體を投げ込まれた彼が、今日又バ

ーテル病室に起つた犯罪を見て、愈々變な氣を起すのは當然な事であらう。彼は暗い思ひに閉されて、頭を頸垂れて歩んで行つた。彼が病院の門を出ようとする時、ジューヴの命令で其處に見張つてゐた刑事が彼の行手を立塞いだ。『失禮ですが、貴方も無論今日の事件を御承知でせうな？……合詞を御承知ですか？』

『合詞とは？』

『さうです、ジューヴさんの合詞がなければ、今日は唯一人お通し申す事は出來ません……』醫師は時計を見た。

『おや、遅くなつて了つたな……では何處へ合詞を聞きに行くのですか？』

『ジューヴさんにお聞き下さい。院長さんの室にゐられます。』

『さうですか、行つて参りませう！』と醫師は今來た道を引返して行つた。

八、犯人搜查

ラリボアジエール 病院長 モーヒル氏はジュエヴ探偵に言つた。

「不思議ですわね！ もう二百人近く検査しましたが、何にも発見されませんね……」

「不思議……と言はい言へますね、しかし何等の効果も無いのに、二百人中から僅か一人の犯人と一本の手位を発見する事も出来ずに、よくまあ二百人の人の検査が出来たものですよ……」

「全く、だが、ジュエヴさん、貴方は忘れてゐる事がありませんよ……」

「へえ、何を？」

「犯人が此の取調を知つてゐれば、手の検査をした上でなければ帰宅させない

と云ふ事を思へば、むざ／＼貴方の検査にかゝるやうな事はあるまいかと思ひますが……」

ジュエヴ探偵も頷いて其の言葉を承認した。

「さうです、仰有る通りです、ですけど院長さん、其の事は私も疾うに考へぬでは無いのです……いやもつと深く考へて居ります。其の補償法も思ひついて居るのです……」

二發の銃聲が轟くが否や、其の場で調査を開始したが、怪犯人の捕縛が假令確然たるものであつても、かなり手間取る事は探偵も承知してゐた。病院の建物は廣かつた、人が一人人目に立たぬ様に歩いてゐる位の事は容易い事であつた。建物に潜んでゐようと思へば雑作も無く隠れてゐられたのである……

「院長さん、此の病院から出て行つた人達は殆ど全部正確に検査したやうに思

ひますが？」

「全く……」

「そこで方法を變へようと思ひます。此處へ看護人でも信用の出来る人を残しておいて、合詞を聞きに来る人を暫時待たせるようにしておいて、今度は吾々の方から搜索に出かけようと思ふのですが……」

「病院を探查しようと思ふのですか？」

「さうです、雑作は無いでせう……」

事實ジューヴ探偵は多くの病室を自分で見廻つて、尋ね求める犯人に出會ひたいものだと思つたのであつた。けれども此處思ひ付の探索が何等の効果があつたもので無いと云ふ事は、自分でも承知してゐた。犯人は双方の話で、搜索の始まつた事を直ちに覺る事であらう、ジューヴの先へ先へと逃げ廻つてやらう

と思へば、探偵は犯人に出會はずに永久建物をぐるぐる廻つてゐなければならぬのだ。

ジューヴは幸ひと豫想即ち豫防である事を知つてゐたので、さう云ふ必然の悲喜劇的なドウく廻りの起らないように、直ちに實行方法を案出した。

「私は部下を全部伴つて来て、前か後の者を見失はぬように並ばせて、病院の入口の壁から出立して、一方の行止り迄行き、其の途上を悉く掃蕩して……各階段の下、各室の中へ一人宛番を残しておきませう……かうして私は階下を全部見廻ります、そして私の行列が人に行會ふ毎に前へ前へと押付けて行きます……かうして階下にある者を全部一隅に追ひ詰めて了ふのです……其處で早速検査をします。其の中に犯人がゐれば好し、ゐない時には更に階上を搜索しようと思ひます……」

ジューズの計畫は古めかしくて、網の中に物を探るやうなものであつたが、其の單純な事や確實な事を論議してはゐられなかつた。

かうして探ぬる者がまだ病院内に居ると豫想したので、必然的に此の警官隊に捕へられねばならない筈であつた。奈何でも追詰められて、嫌應無く検査されねばならないのだ。

『好からう！ 雪隠詰にして了はふ……』とモーヒル氏も探偵の提出した動議に賛成した。

醫師シヤレツクはアンブロージ・パレ街へ出る門を警戒してゐた警官に、ジューズ探偵から合詞を聞いて來ねば出す事は出来ぬと拒絶せられたので、更に後へ引返した。

シヤレツクはポケットに兩手を突込んで、庭の叢の間を、監理部室に背を向け、病室の方へ行つた。其の時はまだ院長室で、病院に用事の無くなつた者に、退出の許可を與へてゐたジューズ探偵に會ふ事が出来るのに、其の方へ行かうとはしなかつた。

シヤレツク醫師は屈托したやうな體で、首を頸垂れ、下を見詰めながらゆるくと歩いて行つた。彼は其の時もう研究室で醫者の白の上衣を脱いで、普通の服に着更へてゐた。彼はもう人目を惹きさうに見える所は少しも無かつた。彼が門の方へ行つたのは、病院を退出するつもりであつた事は勿論である。

シヤレツクは階下の建物の縁にある硝子障子の簾まつた長い廊下の入口に立停つて、禮拜堂の裏手に出ると、外科病室の手術室迄行つた。

シヤレツクは暗い思ひに浸りながら、ふと振返つて見ると、遠くにジューズ

探偵が院長を伴れて自分の方へ來るのを見た。と同時に二人と共に一隊の警官隊が列を作つて、病院内をすつかり探査しようとする事に氣がついた。シヤレツクは機械的に自分と其の一隊の間に相當の距離を隔て、おかうとするやうに廊下の中へ這入つて行つて、突當り迄進んで行つた。彼は外科室を通り抜けて他の部室へ行かうとするらしく其の部室へ這入らうとした。すると其の時二人の看護人がそれを引留めた。

『先生、今其處へ這入つては不可ません。ユガール先生が手術中で入室禁止です……』

シヤレツクは言はるゝが儘に廊下を戻らうと思つた、そして其の積りで二三歩歩み出したが、忽ち又後戻りした。ジューヴと院長とが事務員を一人引連れて、病人や給仕など五六人の人を先に立て其の廊下へ這入つて來たのである。

シヤレツクも廊下の奥へ追詰められた其の人々の中に混つて、ジューヴが今や始めようとする検査の事に笑ひながら横口を利いたりした。

慎重に静かに、ジューヴ探偵は其の廊下の奥に集められた人々を手早く調べて解放した。通過するには彼の前に手を突出して、指を擴げて見せるだけで充分なのである。

モーヒル氏はジューヴの注意で便宜の爲め、伴れてゐた事務員に其の姓名と資格とを書いて交付させた。

其の書附さへ持つてゐれば、病院内を心配無しに往來する事が出来た。

『もう此處では何も調べる所はありませんね？』とジューヴが尋ねた。

『ありません。此の部室の右手には、扉が閉つて居りますが、盲腸炎患者を手

術してゐるユガール博士と助手とがあるばかりです。今その邪魔をする事は出来兼ねます。けれども必要だと思ひなされるなら、外科手術が終つたら、直ぐ此の部室へ來ても宜しい。』

『有難う、私はもう見ておきました、ユガール病室には誰も怪しい人は無いやうでした。ですから此の人達はもう通行免状があるんです。』

モーヒル氏が踵を廻らすのを、ジューヴは再び呼留めた。

彼は廊下の奥に立つ上部に厚い澤消硝子の箆てある大きな扉を指しながら、

『あの扉口は何ですか？』と尋ねた。

モーヒル氏は微笑を浮べた。

『ねこそげ御覧になるんですなあ？ 這入つて見ませう！』

院長は其の大きな扉口を開けて身を歌てると、ジューヴは狭くて暗くてじめ

じめした通路へ進み入つた。

探偵は五六歩前へ出た。其の短かな廊下は天井の風窓から明りがさすばかりで、穴倉のやうな廣い部屋に通じてゐて、部屋の中はぞつとする程冷めたかつた。開け放してある嘴管から絶えず流るゝ水音が、其の單調な騒音で、端か端へ行つてゐる木の編垣より外に飾りとなない其の部屋の沈黙を亂してゐた。

其の編垣の上には白い朦朧とした長い形のもものが横はつてゐた。眼が暗さに慣れて來ると、其の朦朧とした妙な包の形が解つて來た。それは經帷巾を纏つた屍體であつたのである。其の死装束の中からは頭だの肩だのがはみ出してゐて、其の額の上には嘴管から規則的にちびちびと出る冷たい水が絶間も無く流れてゐた。

ジューヴが院長の方を顧ると、

「解剖する屍體を保存しておく所なんですよ、まだ此處にゐらつしやるんですか？……」

ジューヴは其の場の物凄い有様に吾にもあらずぞつとして、否定的に頭を振つた。

「此の部屋は私達の這入つて來た扉口の外に、もう出入口は無いのでせうな院長さん？」

「外にはありません……」

ジューヴは其の不淨部屋に二足三足這入つて行つて、其處に横はつてゐる白い物の上をさし覗いた。

「本當に此の屍體陳列所は物凄い氣がしますね。」
けれども院長は一寸肩を揺つたばかりで……

「なかに貴方、貴方はかう云ふ所を見慣れてゐらつしやらないからなんですよ……」
「此處には家具も無しするから、隠れる事も出来なさううですね、ほかを見廻りませう。」

けれどもモーヒル氏の後に従つて、其の不淨部屋からジューヴ探偵が外へ出ると、計畫通り、階下を見終つて會合する筈になつてゐる部下の者たちに出會つた。彼等の搜索も矢張り無効に終つた。調査中に出會つた者達には何等疑はしい點は無かつたのである。

ジューヴは稍苛立つて、事の結果の失敗に終つたのを怒つて爪を噛んだ。
「二階をよく氣をつけたかい、ミシエル君？」

「貴方が御巡見なすつてからはありません、けれども私達が階段を皆固めて居りますから、通行免狀無しで上つた者は一人もありません。」

『それを確かめてみたいと思つたのだ……宜しい、部下を禮拜堂の裏手に集めて、命令を待つてゐてくれ給へ……』

暫時した後、ジューヴ探偵とモーヒル氏は監理部室で額を鳩めて凝議した。

『奈何です！ 警視さん。』

『奈何したんでせう、院長さん。併し唯かうだけは言へますね。殺人犯人は吾々の手から迂り出してつたんです。』

『網から逃げる事が出来たと思ひますか？』

『略確實です！……病院の扉を飛越えて行つたのかも知れません……』

すると院長は頭を擡げた。

『其塵事が、貴方。あんな高い扉を飛越える事はとても出来はしませんよ……』

探偵は黙してゐた。

『これから奈何する積りです？』

ジューヴは時計を取り出した。

『おツ！ もうお暇しなければなりません……總監へ此の事を報告して、午前七時から此處へ来てゐる部下を交替させねばなりません……』

『ぢや貴方は戻つて來ますか？』

『はあ必らず！』

『奈何してお待ちしてゐませう？』

ジューヴは躊躇した。

『何も爲さらないで宜しう御座います。しかし貴方が尙ほ病院の隅を見廻つて下さるなれば、時間が少し助かると云ふものです……』

ジューヴが出て行かうとすると、モーヒル氏はそれを呼び止めた。

「一寸お聞きしますが……唯今の通行免狀の事ですが、勿論私がそれに反對する譯ではありませんけれど、矢張り貴方のお歸りになる時迄維持しておくのでせうか？……今の所病院内には病院の者だけしか居りませんが……」

「どうも致方がありません。誰が這入つて来て誰が出て行つたかと云ふ事を正確に知りたいと思ひます。併し歸りたいと云ふ人が門番の知つてゐる人であれば、門番に預けてある帳面に其の名を書かせて歸して下さるやうに願ひます。」

「お安い事です、そして勿論の事ですよ。」と答へて、直ちに電話をかけて其の命令を傳へた。

ジューヴ探偵は歸る時ミシエル探偵に向つてかう言ひつけた。

「尙ほ病院内を往來する者をよく警戒してゐてくれ給へ。僕は直ぐ又歸つて來るからね……」

九、屍體冷蔵庫

午後八時頃である、夜は早や暗く沈んで來た。

ラリポアジエール病院にはポツリと燈火が灯されて行つた。病室の澤消硝子にぼうと映る柔らかな光、廊下に輝く強い光、事務所の眩いばかりの光、料理場や助手室の光。

病院中に唯一つ、明りのつかぬ陰惨な部屋があつた。其處にゐる人々には、あゝ！もう明りを見る必要も無いのだ。それはかの不淨部屋であつた。屍體保存室であつた。其冷蔵庫には解剖臺上に置かれて、醫學の進歩に寄與する日の來るのを待つてゐる屍體が保存されてゐるのだ。

二時間程前、ジューヴ探偵が大搜索をした時に見た木の編垣の上の屍體は、

頭上づじやうに落ちてサラ／＼と單調たんてうな音おとを立て、其その硬かたくなつた四肢ししに流ながれる水みづの下したに、凍こほつて小搖さゆるぎもせず横よこはつてゐた。

突如とつじよ！……若もし其その場ばに誰たれか居合ゐあせたならば、慄然りつぜんとして恐おそれ戰おのいた事ことであらう——一個いこの屍體ししたいが動うごいたのだ！

其その屍體ししたいは一目ひとめで廊下らうかと不淨部屋ふじやうべの境さかひの戸口とぐちが鎖とこされてゐるのを見みると、寒さむさの爲ためめにガタ／＼戰おのき、齒はをカチ／＼鳴ならしながら、纏まとつてゐた經帷巾きやうかたびらを遠とほくへ投げやつた。そして熟睡じくすゐした後あとか、息いきを殺ころして潜ひそんでゐた後あとか、或あるひは長病ながわやちひの後あとで、手足てあしの力ちからが脱ぬけて了しまはしなかつたかと試ためして見みる様ように、手足てあしを打振うちふつたり、腰こしを叩たたいたりした。

と遠とほくて何なにか異様いさうな物音ものおとがしたので、恐おそろしい幽靈ゆうれいは忽たちよちまた經帷巾きやうかたびらを取とつて身みに纏まとひ、水みづの下したに行いつて元もとの屍體ししたいに成なり濟すました。

言いふ迄までも無なく誰たれか、此この不淨部屋ふじやうべへ不意ふいに這入はいつて來くるやうに思おもつたのであ
る……

けれども夫それは杞憂きいうに過すぎなかつた。幽靈ゆうれいは再またび經帷巾きやうかたびらを脱ぬ捨すてると、ごし／＼と手てや、腰こしや、肩かたや、胸むねなどを擦こすつて、其その摩ま擦さつで一せう生けん懸命めいに反はん應おうを起おこさうとした。

尙なほ一度ど此この謎なぞの怪人くわいじん物ぶつは水みづの下したに這入はいつたが、十五分ふんもすると附近ふきんの物音ものおとも途絶とだえたので、其その場ばから出でて不淨部屋ふじやうべを歩あるき出だした。

其その不淨部屋ふじやうべの隅すみに立たてかけてある手桶ておけの下したからシャツや服ふくを取とり出だした。彼かれは絶たえずガタ／＼顫ふるひながら、急いそいで服ふくを着きた……そしてすつかり着きて了しまつても尙なほ其處そこに佇たんでゐた。

やがて誰たれかに出會であつても、服ふくの濕しめつてゐるので人ひとに怪あやしまれない程ほどに乾かはいた

と思ふと、怪人物は二時間程前モーヒル氏がジュエツを此の不淨部屋に案内して来た澤消硝子の扉の立つてゐる狭い廊下に行つた。

彼はそつと其の扉を細目に開けて、四邊に誰もゐないのを確かめた。それでも尙ほ暫時身動きもせず佇んでゐたが、終に決心をして廊下に出ると足早にすた／＼と廊下を傳つて行つた。

暫時すると彼は病院の庭にゐた。禮拜堂の方に背を向けて、平然として出口の門の方へ進んで行つた。

彼は幾つかの人影を横過つて行つた。それはジュエツが其處此處に配置して行つた刑事の影である。が二人許り看護婦にも出會した。看護婦は親しげな口調で左様ならと通り過ぎる彼に挨拶した。すると怪人物は其の後でほつと深い吐息を洩して安心した。ひよつこり知人に會つた思はぬ經驗で、自分の様子に

別段異常の無い事を知つたからである。

大きな正門の右手に、アンブロジー・パレ街に出る通用門がある。出入には何時も其の通用門を潜るのである。彼は其の門下へさしかゝつた、二足三足すればラリポアジエール病院の外に出るのだ……と門番が其の行手を遮切つた。

『誰方です?』と言つたが、じつと彼の顔を見ると、『あゝシャルクさんですか! 今夜は大變遅くなりましたね。また二十二番室で御勉強でしたか?』

『えゝ、漸く逃げ出して來ましたよ、シャルルさん。』

そしてシャルクは急がしうに早や門番に離れて、彼と扉との間に出た……と門番は再び道を遮切つた。門番は老軍人であつて、彼に取つては哨令程大切なものは無かつたのである。

『一寸待つて下さい! 此の帳面へ名前を書いて行つて下さい!』

「帳面？ 奈何云ふ譯で其麼事をするんです？」

「院長さんからでは無いんですがね、刑事から此麼事を言ひつけられたのですよ。病院に出入りする人は、日だけは皆んな此の帳面に名前を書いて貰ふんです。」

門番はシャルックを門番部屋へ伴れて行つて眞新しい帳面を開いた。

「貴方は悪い人ではないでせうけれど、まあ書いて行つて下さい、丁度ユガール先生の下です。」

「好いとも、だがね、シャルルさん、あれから奈何なつたい？ 犯人に手がつ

いたかい？ 嫌疑者は誰だい？」

「私に解るものですか、私は警察からも院長さんからも其麼事は伺ないんですもの。私の知つてゐる事と言やあ、五十人ばかりの奴等が汚ない靴を履いて來

やがつて、病人の周圍で大亂ちくをやつて、病室をめちゃくにして、了やあがつて、虻蜂取らずに了つたと云ふ位のもんですよ。まだ片附かないらしい様なんですよ……御覽なさい、シャルックさん……」

そして門番は庭の奥の暗の中に立つてゐる人影を指示した。

「まだあの通りですよ！ は、は、は」と言ひながらインキ壺を取つて來て、

「犯人がまだ此の中にあるとすると、手頸に手錠がつかなければ出られやしませんね……」

シャルックの蒼い唇には謎のやうな微笑が閃いた。多分彼には警察の活動の結果に對して門番と同じ信念を持つてゐなかつたのであらう。多分彼は數時間前シャルックと云ふ醫師が出口も無い廊下の奥に追詰められて、皆と同じやうに指頭を見せねばならない絶對絶命の場合に立到りながら、探偵の眼前で、

あの機敏なシューズの鼻先で、あの聰明な警務課の警視の前で、忽然として姿を消した事を考へたのであらう、忽ち生ける人の世界から脱して、彼唯一人知れる理由の爲めに、屍體の硬直を擬し、死の無感覺を装はねばならなかつた事を考へたのであらう。

あゝ！ 若し見咎められずして過ぎる法を知つてゐる罪人があつたならば、無論如何なる警戒ありとも、氣づかれずして出る法を見出し得る者もある事であらう！……

其の微笑が急に消えた。兩手をポケットに突込んでゐたシヤレツクは、シヤルルがインキ壺を持つて来て、強制署名をさせる帳面をさしつけてゐるのに氣がついたのである。此の大切な場合に當つて、シヤレツクは其の手が水に濡れたやうに、じとくして熱くなつてゐるのを感じた、其れに指頭がズキ／＼と

激しく痛んだ。

『どうぞ書いて下さい。』

と云ふ門番の催促を實行するのは事實難しい事とは思はれなかつたけれどもシヤレツクは躊躇して、手をポケットから出さうか奈何しようかと惑ひながら帳面の載つてゐるテーブルの周圍を苛々して廻つた。

門番はペンをさしつけた……

シヤレツクはふと心附いた。

『シヤルルさん、僕は太變急いでゐるから、濟まないが君、僕の書いてゐる間に、門の傍へ行つて通りがかりの自動車を呼んでくれないか……』

『承知しました……』

門番が背を向けるが否や、醫師は明らかに創所のある右手をそつと注意して

ポケットから出して、人指指と中指とは使へぬもの、様に四指と五指とにペンを挟んで書き始めた……

署名を書き終へると、何事が起きたのか、急に顔色を変へて、あゝと呟いた。シャルルが門番部屋へ戻つて來た。

「自動車が來ましたよ……」

「さうかい、有難う！」

シャルックは急にびたりと帳面を閉じた。彼が逃げるやうに急ぐのを見て呆れてゐる門番を、殆ど突退ける様にして、自動車に飛び乗ると、運轉手に行先を呶鳴つた。

シャルックが帳面を閉づる様を見たシャルルは直ぐ考へた。

「吸取紙は無い。インキが乾きもしないのに眞黒になつて了ふぢやないか！」

もう遅時でも門番は其の帳面を急いで取り上げた。それを開くが否や彼は眼を異様に見開き、視線を署名の上へ集注して、

「訝！ 訝！」と思はず叫んだのである。

十、血染の署名

モーヒル氏は極度に苛立つてゐた……

「貴方が警視廳へお歸りになつてから、更に搜索を致しましたし……私の信用してゐる看護人達や、すつと以前から使つてゐる取締なども病院の扉口々々を離れませんでした……要するに文字通り貴方のお話通りにあらゆる警戒をしてゐましたが……終に無効でした！……」

「何にも發見されませんでしたか？」

「えゝ？ 犯人が見付からなかつたばかりではありません、犯人の通行した事を示すやうな徴證すら得る事が出来なかつたのです……」

「不思議だなあ！」

「不思議の段どころちやありませんよ！……犯人はパーテル科の婦人病室で發砲すると、不思議にも亦巧々と姿を消して了つたやうです！……貴方は好い處へ氣がついて、指に傷のある者を發見する積りで、病院内にゐる者の手を全部検査なすつたが……それも何等效を奏しなかつたのですものなア……」

「僕は犯人が大膽振を發揮したのだと思ひますよ……屹度奴は何等かの方法で吾々の懸けた罫を知つたのでせう。其處で病院の出口に姿を現はさないのです。だから……」

「だから奈何したんです？ それで貴方は奈何信じてゐるのですか、ジューヴさん？……」

「なあに、何にも信じては居りませんがね……如何でせう？ 一方から見れば拳銃を二發々射したから犯人はラリボアジェル病院に這入つて來たと云ふ見

解を明瞭に下す事が出来ませう、他面から見ると、此の場合彼の捕へられる事は殆ど確實なのだから、奴は出てゐないと断定されませう、だから奴はまだ病院内にゐて、何處かの隅か……地下室邊に潜んでゐるのだと結論しなければなりませんまい……」

けれどもモーヒル氏は探偵の断定に反對した。

『それや承認する事が出来ませぬね！ 當病院は現代の法規に従つて建築された病院なんですよ、他の病院のやうに轉々として人の手に渡つて改造されたやうな建物ではないのです……で私は此の建物をよく承知して居ります……私は自分で到る處を搜索し探查しました。犯人が病院内にゐない事は絶対に確實です……』

併しモーヒル氏がジュエヴ探偵の断定を承認する事が出来なかつたと同じや

うに、探偵も院長の言葉を信ずる事が出来なかつた。

探偵は稍皮肉な微笑を浮べた。

『ですがねえ、院長さん、貴方のお説でも如何にもする事の出来ぬ事實があるんですよ。犯人が此處へ這入つて来て、出て行かないとすると、まだゐるので……』

『居りません！……』

ジュエヴは思ひ惑ふやうな體であつたが院長は絶対に確信してゐる様であつた……

暫時黙つてゐたモーヒル氏は臆てまた言つた。

『さう云ふ事は貴方のしようと思つてゐらつしやる事を示してはゐませぬ。犯人が此處にゐるにしろ出て行つたものにしろ、奴を捕縛しなければなりません』

い。それでなければ、あのジョゼフインはあの悪漢の暴行から逃れる事が出来ません……」

「お説の通りです。」

「それに又、ラリボアジェル病院は不取締りだの、不行届だのと言はれるやうな仕儀に立到ります……」

院長が最も心配してゐるのは明らかに此の點であつた。併しジューヴは心に留めなかつた。彼は更に思案した。

「仰有る通りです。何よりも緊急問題はジョゼフインを保護する事です……あの女は今どんなに言つてゐますか？ 快くなつて行きませうね？」

「はあ、直き快癒するでせう……今朝は熱も下りました……」

「何か言つてましたか？」

「別段」

「何にも見ませんでしたか？」

「え、何にも！ 助手が興奮してゐる時に長く話をするのを許さないものですから、二言三言話をしてみました。それで見ると、殆ど確かと思はれる程に事件の起つた事を知らなかつたらしく思はれます……ルパールの這入つて来たのも知らなければ、撃たれるのも知らなかつたらしいやうです……知つてゐるのは、来たのはルパールで、且つ奴が來ると言つたら來ずにはおかぬと云ふだけの事でした、それをあの女は恰も自慢するやうに主張してゐるのです……一言で言ふとあの女は目下の所、不思議な心的状態にあるのです。事件の起る前よりも落着いて來て、今では、ルパールが傷をさせるだけで済ませておくなら殺さうと思つて來たのではないと思つてゐるらしいやうです！」

ジューヴも同意するやうに頷いた。

「成程、あゝ云ふ女は殴られるのが好きなものです……ルパールはジョゼフイ
ンを狙撃して女を征服したのです……あゝ云ふ無頼漢の社會のやうな特殊な社
會の心理を、誰が正確に寫し得ませう？……が其麼事は奈何でも好いとして……
ルパールは身の成行に就いてジョゼフイは奈何言つて居りますか？ 無論
追跡の計畫では無く、若しルパールが罪人であるとする、奈何したら奴が逃
げられるか、其の方法の事で何か言つては居りませんでしたか？……疑をか
けては居りませんか？」

院長は手で探偵を制した。

「扉を叩きはしませんでしたか？」と尋ねたが、念の爲めに、「お這入り！」と
言つた。

扉が細目に開くと、一人の男が引退る用意をして、恐々姿を現はした。

「院長さん、一寸お暇は御座いませんか？」

「お前にかい、シヤルル？」

そしてジューヴの方を顧みながら、

「正門の門番ですが……奈何致しませう？……」

門番は漸く心を決めて這入つて來た。

「院長さん、今夜犯罪の事で、歸る人に署名を取るやうに仰有りつけになりま
した其の署名の事ですが……」

「うむ、それが？……」

「院長さん、唯今十一時でムいまして、もう誰も歸りませんから……」

「成程！ 併し其麼事を一々言つて來る必要は無いよ……」

「實は其の……此の帳面に血がついて居りますので……」
 ジューヴは椅子から跳り上つて、門番の方へ飛んで行つて其の手から帳面を引たくつた。

「血だと！……」

彼は病院を出る人からいちく署名を書くやうに頼んでおいた帳面の頁を丁寧熱心に繰つた……

其の頁が開かれた！……ジューヴは驚きの餘り思はず聲を立てようとするのをやつと堪へた。

面白い発見のあつた事は院長にもジューヴの様子を一目見て推察された……ジューヴは口を開かうと思つたけれど、シャルルを見てふと躊躇した。てモーヒル氏の承諾をも待たず、門番を追立てた、

「宜しい、後で君に會はふ。」

扉が閉されて門番が見えなくなるが否や、ジューヴは開いた帳面の上に指をおいて心配さうに尋ねた。

「シャルレック醫師の署名です！……御覧なさい！……そして其の直ぐ下の手の當る所に、此の血痕です……これは奈何です？」

「だが……併し！」

「シャルレックは指に傷をしてゐたが、吾々の検査する事を知つてゐたので、これを言はない方が好いと思つたのでせう！」

ジューヴは口早に自分の判断を續げ、深く思を凝す様な風で言つたが、立上つて仔細に署名帳を調べてゐた院長はそれを遮切つた。

「だがシャルレック醫師は……」

「シャレットク醫師は發砲された時部屋にゐました……一瞬間前に拳銃の落ちてゐた扉口から這入つて來たが、自分の前後には誰もゐなかつた事を自分で認めてゐます……ふむ！ ふむ！ 此奴は面白くなつて來たぞ、私の思ふにはあのドク……」

「馬鹿な事を！ シャレットク醫師が犯人だと云ふ譯が無い……」

「何故ですか？」

「私が知つてゐるからです……」

「本當に？……」

「よく記憶してゐますが、七ヶ月前に私の舊友の或る縣知事の紹介で來たのです……シャレットクは外國のドクトルで、白耳義人で、眞面目な人物なんですよ……間歇熱の研究の爲め、特に此處へ來てゐるのです……清淨無垢の男で

す……貴方はあの男をルバルなどと、シヨゼフィンなど、同視してゐらつしやるんですか？ ジューヴさん、あの男が此の事件に何等關係の無い事は、すべての事が證據立てゝゐるではありませんか……」

ジューヴは暫時前に、椅子の上に投げ出しておいた帽子とステッキを慌しく取り上げた。彼は苛々と慌て込んでゐたので、院長が引張るのも殆ど知らなかつた。

院長が「總べての事がシャレットクの無罪である事を證據立てゝ居りますよ！」と結論した時、ジューヴは重大な場合の時に何時も見せる斷乎たる態度で、院長の肩に手をかけて、其の顔を眞正面に見成りながら、冷然たる調子で、

「院長さん、推測は證據にはなりませんよ……證據が推測に當らぬ場合には、唯證據だけに頼らねばなりませんからね……」

「だが貴方は證據が無いでせう！……」

「十もあります！……」

「それでは！……」

「此の赤い小さな點が、此の帳面に附着した僅かばかりの血痕が、モーヒルさん、正しく一箇の證據ではありませんか……一箇の自白です！……此れを以てしてもシャレック醫師が指に傷をしてゐながら、それを何故吾々に言はなかつたと云ふ事を説明する事は不可能です。」

「符合です！」

「奈何とも仰有るが好い！ けれどもあの人の手に取つては非常に恐るべき符合ですよ！」

院長が返事をするどころでは無く、一瞬間茫然としてゐると、ジューヴは几

帳面にお時儀をした。

「院長さん、勿論私は何にも斷定は致しませぬ、何等の斷定も致しませぬ……」

「私が唯今貴方に申上げた事は、貴方と私との間の秘密になすつて下さい……が明朝確とした消息を齎して参ります……」

もう一度恭しくお時儀をすると、

「私には私の計畫がムいす！」

と言ひ捨て、モーヒル氏の部屋を辭した。

院長室を出て扉を締める時、探偵長は思はず手を採合した、それ程彼は愉快を感じたのである。

「今度こそは掴んだぞ！……」

彼は足早に階段を降りて、庭を過ぎり、門番小屋の扉を打叩いた。

「ねえ、君、シャレツクは本當に奈何して出て行つたのだい？」

門番は院長さんを苦しめ、警察を惱ました事件で、自分が一役を演ずると云ふ事に誇を感じたので、シャレツクが門へ来た事、署名を書いてゐる間に自動車を呼んでくれと言つた事、それから不注意からであらうが、書放しのまゝ帳面をふせて了つた事などを、仔細に話した。

「さうかい！……有難う！……」さう言つてジューヴは門番に酒錢を握らした。探偵は今度は本當に病院を出た。

「其の粗相が意味深長だて！ 手間取らせて遠くへ逃げようと云ふので、血のついた帳面を閉ぢたシャレツクの仕方が意味深長だ！」と彼は考へた。

ジューヴはマジャンタ通りへ出ると馬車を呼んだ。

「モンマルトル街、都新聞社迄やつてくれ、好いかい？……」

數分間後には、探偵はジエローム・ファンドールの事務室に案内せられてゐた。併しジューヴが浮かぬ顔をして、物案じ顔なのをファンドールは眼早く見て取つた。

「何か變つた事でも？」

「うんとある！……だから君に會ひに来たのだ……」

青年記者は莞爾した。

「だから貴方は好きだ！……有難う、ジューヴさん。貴方のお蔭で僕は絶對的に除外例の特種が取れますよ。貴方も多分御承知でせうが、都新聞は此の頃確實な報道をする唯一の新聞になつて來ましたよ。」

探偵はラリボアジエール病院での調査の次第を詳しく話し聞かして、かう話を結んだ。

「かう云ふ次第なんだ……これで明日は面白い記事が書けるだらう、え？……」

「全くですよ！」

「まだ捕縛しないけれど、それは時間の問題だと思ふ……」

「まあさうですね、だが貴方は奈何云ふ手続をする積りなんですか？」

ジューヴは立上つた。

「まだ未定だ……ちや失敬！」

フアンドールは探偵を部屋の扉口へ送り出した。彼の唇には微笑が泛んでゐた。ジューヴが外へ出ようとする、フアンドールはそれを呼び止めた。

「ジューヴさん。」

「何だい、フアンドール君？」

「貴方は何か隠してゐらつしやるでせう？……」

「僕が？ 奈何して、隠してゐるものか！」

「いゝえ、隠してゐらつしやる！……嘘を仰有つたつて駄目ですよ！……僕は好く知つてゐますから、黙つてゐたつて其の手に乗りはしませんよ……」

「黙つてゐることは？……」

ジューヴは呼返されて向直つた、そして机の上に凭掛りながら、友人の顔を不審さうに打眺めた。

「奈何云ふ意味なんだい？」

「唯種を持つて来て下さるだけで、態々此處迄ゐらつしやつたんぢやないでせう？……」

「えつ……」

「いゝえ！ 僕に會ひにゐらつしやるには何かお考があつたのでせう、所が

考が變つたのでせう……奈何しては！ 貴方は奈何なさる積りです？……」

「それや君の誤解だよ……」

フアンドールは立上つた。

「ようムんす！ 僕にも考がありますから……貴方は僕に言ひたくない事をしに行らつしやい……ようムんすとも！……僕は後から跟いて行くばかりです……」

青年記者の言葉にジューヴも弱つたらしく肩を揺つた。そして終に椅子の上
に身を落した。

「僕の心配してるのはかう云ふ譯なんだよ。だがね君、君を其の話に乗せたく無いのだ……要するに君に危い事をやらせたくないからなのだよ！」

「え、さうでせうよ！」

「何だい、さうでせうつてのは？」

「解つてゐますよ！……ジューヴさん、貴方は危険な仕事に僕も仲間にしよ
と思つて此處へゐらつしやつたんでせう……所か心配になり出したものだから
僕を伴れて行くのを中止にしたんでせう？……」

探偵は頭を垂れた。

「僕の位置に立つて見給へ、成程、僕は君の勇氣のある事を知つてゐるから、
危険な事になると何時も君の事を思ひ出すのだ……けれども一方から考へると
それは君の仕事ぢやないのだから……」

返事をする代りにジエローム・フアンドールは巻煙草に火を點じて、兩手を
揉合し乍ら、

「何處へ行くんですか？」と簡單に尋ねた。

ジュエーヴは、フアンドールが一度聞きかけたが最後、思ひ止まらせようとしても無駄な事である事を、よく知つてゐた。彼は言葉よりも更に優る感心したやうな眼で、稍久しく青年記者を見成つてゐた。

ジュエーヴは勇士であつた、自分にもそれを知つてゐた、けれども青年記者の大膽な平然たる態度には舌を捲かすにはゐられなかつた。

『今夜シャレツク醫師の家へ行かうと思ふのだ！……彼が家にゐれば答辯を強要して、事實を質すのだ……ゐなかつた節には、家をすつかり調査するのだ……多分面白い微證が得られやうと思ふ……僕には物事が好く解つてゐる、ね、フアンドール君、そして明日、あの男に對する逮捕状を貰ひたいと思ふのだ。繰返して云ふが今夜彼奴の自白を……彼奴に手錠を嵌める機を得なかつた曉には……』

『ふむ！』

『さうだ、其の時こそ……僕等の身命を擲つ時だ。と云ふのは彼奴も今自分にかつてゐる嫌疑をとても欺く事は出来ないと思つてゐるからなんだ、併し此の事件は夫れ位の苦勞をする價値は充分あるよ……』

さう云ふと不意に決心の臍を固めて、最近の勝利を豫期する時に何時も使ふ愉快さうな調子に變つて言ひ加へた。

『勿論、強盜のやうに僕は合鍵を一束持つてゐる。奴の手を借りないでも、扉を叩かないでも、シャレツクの家の中へ忍び入る事が出来る……夜も暗だし……都合が好い……』

ジュエーヴは兩手を揉合はした、彼は再び軽い心持を恢復した。

『實は参考品を持つて來た。君はシャレツクを知つてゐるだらう、がジョゼフ

インも知つておかなくちや不可いけない……どんな事ことが突發とつぱつするか知れやしないか
らね……ほら、これが其その寫真しゃしんなんだ……病院びやういんでそつと取つて來たんだよ。』
ジューヴはフアンドールの机つくえの上に寫真しゃしんを投げ出して、愉快ゆくわいさうな面持おもてで冗じやう
談だんを言いつたりした。

『若い女わかをんなは悪わるかあないねえ？……』

十一、砂の雨

『かうして人ひとの家うちへ行くのも餘あまり好い心持こころもちでは無ないね、だがあの家うちを水車すゐしゃ小屋こや
だ位くらゐに思おもつて行ゆけばねえ！』

と言いつてジューヴはにや／＼笑わらつてゐるフアンドールを眺ながめた。

二人ふたりはフロシヨール長屋ながやのシャレツクの家うちの立關げんくわんに相並あひならんで立たつてゐた。

眞夜まよなか中頃なかごろの刻限こくげんであらう。ジューヴ探偵たんていと青年記者せいねんきしゃフアンドールとは、入口いりぐち
の硝子扉がらすどを洩もれてさす、長屋ながやの道みちを明あるくする爲ために建たてられてゐる瓦斯燈がすとうの
黄色きいろい微かすかな光ひかりを浴あびてゐた。其その薄明うすあかりで、二人ふたりは自分等じぶんらが何處どこにゐるのか
容易よういに見分みわける事ことが出來できた。それはかなり廣ひろい立關げんくわんの間まで、客間サロンと食堂しょくどうとに通つう
ずる扉口とぐちが兩方りやうほうにあつた。奥おくの方ほうには廻まはり階段かいたんがあつて、其その下したに窖あなぐちの入口いりぐちが

見えてゐた。天井には火の灯つてゐない燭臺吊が懸つてゐて、壁には黒い帷が張つてあり、其の間に狩の道具などが飾付けてあつた。

ジューヴとフアンドールとは暫時其場に佇んでゐた。二人は不正ではあるけれど、又道理に叶つた手續でシャレツク醫師の家に忍び込んで来た所である。勿論此の様な怪行爲や、それから生ずる結果に一種の不安を感じたばかりでは無く、シャレツクの在宿してゐる事を知つたが爲めに、更に其の心配が大きくなつたのである。

事實今もジューヴとフアンドールとが此のフロシヨール長屋に來た時、門番小屋の前を見咎められないで通り抜ける代りに、扉を叩いてシャレツクがゐるかゐないか尋ねて來たのである。すると門番の女は、

『え、二時間程前にお歸りになりましたよ、丁度お歸りになる所を見ました。』

とはつきり答へたのである。

其處でジューヴとフアンドールとは歩き入つて、家の扉に寄り添つて、庭へ這入り、門を開け、拔足差足で踏段の所迄忍び寄つたのである。

一瞬間ジューヴは何喰はぬ顔で呼鈴を押してみようかと思つたけれど、四邊もシンと静まり返つてゐるし、シャレツクも屈托も無く樂々と寢てゐるに相違ないと直ぐ見極めをつけたので、斷はらずに家の中に忍び込もうと思つた。扉に門さへさして無ければ、中に饑さへ嵌めて無ければ、鍵を合はして合鍵で開けて入る事が出来るのだ。ジューヴは現に強盜のやうにちやんと道具を携へてゐた。

すると其の試みは美事に成功した。音をも立てず、難無く其處へ入れたのである。

ジューヴは自分の計畫をフアンドールに話す前に、先づ何時も携へてゐる護謨の上靴を渡して、各自自分の靴へ薄くて鞆やかて音のせぬ袋をかけた。それからジューヴの合圖と共に、フアンドールは探偵の後に従つて二階へ足早に登つて行つた。

探偵の考は不意に寢室へ跳り込んで、寢惚けて茫然としてゐる所を利用して三四重要な尋問をするばかりでは無く、推測に依ると、あの意味深長の血痕を帳面に残して行つたらしい、右手の指を調べるつもりであつたのである。

ジューヴは部屋に這入るが否や、フアンドールはスイッチを捻つて電燈をつけた。二人は無念な顔をした。

部屋は藻抜の殻だつたのである！

二人は愚圖々々してゐなかつた。ジューヴは決斷に富んだ男であつた。

『書齋へ！』と彼は即座に呶いた。

忽ち二人は曾てある一晚窓掛越しに見張つてゐて馴染のある部屋へ這入つた。二人は四十八時間前、眼前で奇怪極まる大犯罪が行はれながら、何にも見えなかつた不可思議な部屋へ再び來た事に感慨を催しながら、大急ぎではあるが詳しく調べた。

けれどもシャレツクは矢張り其處にもゐなかつた。

フアンドールは直ぐ隣りの浴室をも調べた。そして二階の階板(階段の上)にごたぐとしてゐる諸道具を刎ねのけたりしてばたぐ音のするのも構はず階段を馳け降りて、早や既に階下に降り、シャレツクが客間か食堂に隠れて居りはしないか、隙を見て逃げ出しはしないかと思つて探つてゐるジューヴ探偵の傍へ戻つた。

其の部屋々々の窓も雨扉もびつたり締まつてゐて、彼が念入りに締直しておいた玄関の間の踏段に出る扉にも手のついてゐない事を、直ちにジューヴは確かめた。

ジューヴはほつと溜息をした。彼は新しい不安に悩まされてゐた。探偵は自分等のゐる部屋に明りは不用だと思つたので、明りも灯さぬ暗中にフアンドールの手を探りながら呟いた。

「都合が好くもあるし悪くもある……」

「奈何して？」

「シャレツクが此處から確かに出て行かないものなら、彼奴は吾々の來た事を知らない道理だ。よし、彼奴と勝負をつけなければならぬぞ。」

フアンドールは何か言はふとして口を噤んだ。

突然ジューヴの言葉を證據立てるやうに、微かな音が聞えて來た、明らかに階上から來るのだ。夜の静けさの中に、板の音、急ぎ足の音、物のさらさらと觸れ合ふ音、家具の打當る音などが傳はつて來るのである。

フアンドールはぎくつとした。彼はジューヴと共に此の家に夜を明した時にも、かう云ふ物音を聞いた事を思ひ出した。彼は本能的に自分と探偵とを驅つてルパールであると同時に、シャレツク醫師の後を追窮せしめた此の種の事件の不甲斐な盲目證人に、又もなるのかと考へた。

けれどもジューヴはさうした既往の追想などはしなかつた。忽ちのうちに彼の心は定められた。フアンドールは暗黒の中で彼の撃鐵を引く音を耳にした。ジューヴは客間から出て、階段を登つて行つた、フアンドールも同じく拳銃の用意をして彼の後に跟いて行つた。

二階の電燈は降りる時につけ放して来た……不意に暗黒の中から出たので、最初は其の光に眼を打たれたので眩しかつた。其の八角形の階段の踊場の角々には鏡が飾つてあつて、それが電光を反射するので、それだけ光度が強かつたのである。

ジューヴは二階に上つてから尙ほ明瞭物音のするのを耳にした。でシャレツクか、それでなくとも誰か書齋にゐるのだと断定した。そして其處に飛び込んで行つた。

三十秒もしてから彼が訝しさうな顔をして其處から出て來ると、フアンドールに突當つた。

『オヤ！』と叫んでスイッチを捻つた。不用意にも電燈をつけ放しておいたのに氣がついたのである。『おい、君は何處から出て來たのだ？ 僕の後にゐる事だと思つてゐたのに！』

『貴方に離れて音の聞えて來る書齋へ行つたばかりですよ……』

『だつて僕も書齋で君の聞いた音を……』

がフアンドールはそれを遮切つた。
『貴方は奈何かしてゐるんですね、ジューヴさん？ 書齋へ入つたのは僕で、貴方は……』

ジューヴはサツとマッチを擦つて、フアンドールの顔にさしつけ、青年記者を睨みつけて暫時呆氣に取られてゐた。

『オヤ、はてな……』と探偵は顔に手を押當て、呟いた。『惶てもや不可ない！……僕は書齋から出て來た、君も出て來たと云ふ、其座馬鹿げた事は無い、併し僕等は其の中で出會はなかつたのだから、兎も角も一緒では無かつた』

んだ。僕は此の階段の踊場に入るが否や書齋へはいつて行つた……』
 『そして僕も。』

ジューヴは落ち着いてはゐたもの、考へ倦んで來た。

『其麼馬鹿な事を言つたつて、君……』

彼はふと口を噤んだ、ファンドールは主張した。

『もう一度實驗して見ませう、ね、そして電燈をつけておきませう……』

『いや點けないでおき給へ、其の方が用心が好い、所で今の通りにやつて見よう。』

二人は暗中で階段の上まで戻つた。踵で最終の段々を探ると、ジューヴが小聲で叫び出した。

『今の様に僕は四歩進む……踊場へ來る、戸帳を掲げ、翻して這入る……』

ジューヴは言つた通り精密に身を動かすと、實際書齋の中へ這入つた。そして鋭敏な觸覺で部屋の中にあるテーブルだの角の長椅子だのを手で探つて確かめた。彼が沈黙すると二夜前の苦悶の時のやうに、長い時を刻んでゐる暖爐棚の時計の振子の規則的な音が、明瞭に聞えた。

ジューヴは小聲で呟いた。

『すると書齋にゐるのだな？……』

けれどもさう云ふか言はないうちに、打倒れんばかりに驚いた。

ファンドールの聲が、非常に明瞭に、非常に静かではあるが、彼からすつと隔たつた所から、静かな夜の中で答へるのである。

『僕も書齋の中に居りますよ！』

そこでジューヴも不用心だと言つてゐられないのでスイッチを捻つてみた、

部屋はばつと明るくなつたけれども、フアンドールは其處にゐなかつた！

ジューヴは一跳到踊場へ飛出すと、ばつたりフアンドールに衝突した。

『書齋から出て来た……』

と二人は同時に叫んだ。

二人は肩を掴み合つて、茫然として顔を見合せた。

さうなるともうシャレックだのルバルだのを追跡する事は問題でなかつた。ジヨゼフインの事も、病院の事も、此の不可思議な家の事も考へなかつた、恐しい怪奇と同時に、滑稽な錯誤に彷徨せしむる此の馬鹿げた事實の前に二人は茫然として了つた。

『ジューヴさん！……』

『フアンドール君！』

『奈何です、何か解りましたか？』

『此麼莫迦な事はないよ！』

けれどもジューヴは馬鹿にされてゐるやうな男では無かつた。フアンドールも安々と茫然自失させられるやうな男ではなかつた。奈何でも此の奇怪な事實を闡明し、如何にして又何故に二人の男が同じ部屋へ共に入つたのに、相見ることが出来ないのか、それを探知しないでは措かなかつた！

嗚呼！實に此處に秘密の鍵があるのだ、忽ちジューヴ探偵は、解釋する事をも得ず、眼前にゐながら何物をも見る事を得なかつた先夜の事件の解釋を豫想した。

多分鏡か硝子の機關で、半分だけ見せるやうに、部屋の一部が隠されてゐるのだらう？……けれどもそれにした處で奇怪至極だ。

「奈何しよう？」

「ジューヴに一つの考へがあつた、黙つて思考だけで、それを青年記者に傳へた。」

「フアンドールは惟々として彼の伴れ行くに委した。」

「ジューヴは彼の腕を取つて、何か思はぬものが來て、二人を引離しはせぬかと思つたやうに緊密と握り締めた。」

「二人は双方しつかり抱き合つて進んだ、ジューヴが足を出した、フアンドールも其れに並んで足を進めた。」

「彼等は書齋に入つた。二人は互に顔を見合して、更に打見成り合つた。」

「あゝ實に奇怪極まる事であつた！」

「光學の玩弄にかゝつてゐない事を確かめる爲めに、二人は部屋を見廻つたり」

「家具を撫でゝみたり、壁を叩いてみたりしたけれど、何にも異常な點は無いらしく思はれた。」

「奈何だい、解つたかい？……。」

「僕の臍に落ちない事は、」とフアンドールは顔色を變へて言つた。「僕の思違ひでなければ、貴方は戸帳を潜ると右手の方へ行らつしやつたが、僕は今左手の方へ來たやうに思ひますよ。」

「其麼事は不可能だよ……。」

「でもさうですよ。」

「ジューヴも友人に反對しようとはしなかつた、そこでフアンドールの言葉を聞いて惑ひ始めた。」

「要するに此の部屋には二つ出入口があるのだらうか、そして違つてゐる廊下」

「同じ一つの出入口に接してゐるのだらうか？　もう一度やつてみよう……」
 ジューヴとフアンドールとは再び踊場へ出た。其れからジューヴは進んで行つた。フアンドールは自分の考へ通り、部屋の中へ入るのに潜らねばならぬ帷を掻き分けて左手を向いた。

二人は書齋の中に入つてゐた。確かに一方から行き着く事が出来た。が出入口は一つしか無かつた！

ジューヴは小首を傾けて躊躇した。

「奈何だね、フアンドール君、此處に此の事件の結端があるんだよ、併し僕には皆無解らない。僕は今右の代りに左へ行つたらうか？　實に解らぬ……が……」
 暫時沈黙してゐたジューヴはドンと一つ拳骨でテーブルを殴つた。

「畜生！　解つたぞ！　もう一度やつて見よう。」

恐怖驚嘆の情よりも彼の心を悩ました不安な好奇心から、額に冷汗を流してゐる探偵は、機械的に長椅子の上に帽子を投げ出して、矢張りフアンドールの腕を引張りながら外へ出た。

之が他の場合なら、今はもうしつかり抱き合つて、一緒になければ一歩も歩まない驚き顔の二人の男の進歩はをかくも滑稽至極に見えたらう。之を目撃した人たちは先づ失笑する事であらう。けれども如何なる皮肉も、如何なる滑稽も此の怪事、此の知られざる物の前にあつては影を失ふが如き場合である。

ジューヴもフアンドールも自分で自分を嘲弄しようとは思はなかつた。

其の行動と其の言葉とを同時にする爲めの如く、其の行動を發する言葉に合はせる爲めの如く、ジューヴは聲高に言つた。

「左手で分けて、戸帳を潜る……小さな廊下に入る、右を向く、即ち戸帳を掲

げてゐる方とは反對の方である、前へ進む、そして書……』
『書齋の中に入る……』とフアンドールが其の後を嗣いだ。

が今度はジューヴが青年記者の續けて言はふとする言葉を遮切つた。

二人は暗い廊下から、明るい部屋の中へ入ると、ジューヴは立停つた。彼の眼は自然に今帽子を戴せておいた長椅子の上に走つた。所が帽子は其の上に無かつたのである！

大いに打駭いた探偵は腕を放したフアンドールを見成つた。

フアンドールは煖爐棚の傍へ行つてくるりと體を廻らしてジューヴを見た。

『實に變だなア。僕は今しがた時計を留めておいたのですよ。劍を六時の所へやつておいたのです。所がこれ、時計は動いてゐて、正確な時間で即ち二十二分を指してゐます。一體奈何云ふ事でせう？……』

ジューヴは返答する所ではなかつた。彼もフアンドールも均しく跳り上つた。カチツと云ふ音と共に、電燈がぱつと消えて了つたのである。

『失敗つた！ もう……』とジューヴが言ひかけたが、フアンドールが驚き聲で其の言葉を遮切つた。

フアンドールが引返して、廊下に出ようとするとなかに衝突したのである。

『ジューヴさん！ ジューヴさん！ 扉が締りましたよ。締込まれて了ひましたよ！』

探偵はスイッチを捻つたが無駄だったので、ポケットから懐中電燈を取り出してフアンドールと力を合せて、必死になつて押したけれども扉は頑として震ひもしなかつた。

二人も暫時は驚いて顔を見合すばかりであつた……

ジューヴは、大急ぎで窓の方へ飛んで行つて帷を分け、窓を開けてみると、鐵扉が下りてゐて、此の方からも逃げる見込は無かつた。流石のファンドールも眞蒼になつた、ジューヴもよろ／＼と彼の方へ歩み寄つた。

「出口を絶たれた！ 出口を絶たれた！」

けれども更に新しい一個の苦痛の爲めに二人は急に身を固くした。

「奈何なるでせう？」とファンドールが息も詰りさうである。

「解らない！」

「一ぱい喰されたな？……」

「家が廻るのだ！……」

「まるで……」

ジューヴとファンドールとは餘りの驚きに家具へよろめきかゝつたけれど、

自分等の心をかなり明らかに分析する事が出来た。

彼等二人が俄然幽閉された部屋は事實靜かに動いてゐた。探偵と青年記者とは、カチリと云ふ音と共に電燈の消えた刹那、床がぐくりと足に響くのを感じたのである。其の感覺は覺えの無い感覺ではなかつた。エレベーターで降りる時に、感じる感覺であつたのだ。

一瞬間二人は何か恐しい災厄が、家でも倒潰しやしないかと思つた。けれども規則的に下降して行つた。二人は確かに奇妙なエレベーターの中にあつたのだ。エレベーターに乗つて降りてゐたのである……

けれども書齋はそれ程下へ降りなかつた。探偵とファンドールとは機械が下に着いて、運行の止まる軽いショックを感じた。エレベーターが直ぐ止まつても、二人は尙ほちつとしてゐた。

「ジュージさん？」

「フアンドール君？」

「思つた程大した事ではありませんな……」

「うん、もう着いたらしいね、後は何處へ着いたのか見るばかりだ。」

初めの驚きが行過ぎると、二人は大膽にも冗談などを言ひ初めた。

二人は自分等の體さへ粉碎されない以上は、少しも意氣を沮喪しないで、曾て経験した事の無い程心を惱まされた怪事を看破したと思ふと、愉快をさへ感じてゐたのである。

全然同一な書齋が二間あつて、其の一つは昇降機になつてゐる事が此處に明瞭にされた。延いて今夜の事件ばかりでは無く、先夜行はれた殺害事件も解釋する事が出来る譯である。

成程、犯罪の當夜、ジュージとフアンドールが窓掛の蔭に隠れて、一夜を何事も無くテーブルに向つて仕事をしてゐるシャルックを見守つてゐたが、ルパールの方ではもう一つの書齋で苦も無く見知らぬ女を殺したのであつた。

併し彼等の今ゐる部屋がそれであるのか、又はもう一つの部屋がさうなのかフアンドールの發見したのがそれか、ジュージの知つてゐたのが此れか、それは奈何でも好いとして、警視廳の名探偵と都新聞社の敏腕記者とが自分等の追跡してゐる犯罪者に美事に一泡吹かせられた事に疑を容れる餘地は無い。

「やれ、機關仕掛の家へ裝飾のやうに入れられて了つたね……」

「忌々しいな！……」

「全くだ！」

「でも此麼仕掛があらうたあ夢にも思ひませんでしたからね！……」

「君は誤解してゐるよ、これ位の事を思ひつかなかつたのが愚の骨張さ。かうして解つて見ると、自分の茫然とした事が泣きたい程馬鹿だつたと思ふねえ……機械は巧みに施してあるのだから、これを見つけるにはもつと細かな用心をして這入つて來なければならなかつたんだよ。」

フアンドールは肩を聳やかした。

「貴方は飛び込んで行つたんですねえ、ジューヴさん、だから解らぬ事が何か起らねばならぬ筈なんだ……だが此の様な有様にならうとは、思ひもつきませんでしたよ……」

「止し給へ、君には解らない、大體僕等には犯人の目的が解らない……恐らく疑はれてゐる大秘密が……」

「ジューヴさん、また貴方はロカンポールを思ひ出したのですか、でもロカン

ポールは死んで了ひましたよ……」

けれどもジューヴ探偵は暫時沈黙してゐた後、最初は軽く頭へた嚴肅な聲で言ひ放つた。

「ロカンポールは死んでも、フアントマが生きてゐる！……」

すると何時もの冷靜にも似ず、名探偵にさう怒鳴られるとフアンドールは慄然とした。

青年記者はそれとは言はなかつたけれども、暫時前から、其の惱まされた心の中に、奇怪なるフアントマの朦朧とした謎の姿を描いてゐた。數年前から公衆の安寧を覆し、隠れたかと思へば又現はれ、死と驚異を振撒いて、またも姿を掻き消した彼の怪盜の姿を描いて見た。生きてゐるのか死んだのか、超自然的人物か、空想上の人物か？ それは解らなかつたけれど……併し……

「ジューヴさん！……」

「フアンドール君！……」

「其麼氣がしますか？」

「する！……」

「何てせう？」

「それは解らぬ！」

けれども二人は喉に詰つたやうな聲で語り合つたのである。

二人は双方奇妙な、空想する事も出来ぬやうな、説明する事も出来ぬやうな

感情を味はつてゐた。

其のうち手や顔や耳の皮膚をチク／＼刺されるやうな氣がして來た。と同時に空氣が重苦しくなつて來て、呼吸をするのも苦しくなつて來た……

ジューヴは自分の心を口早に話した。

「何だか體を針でチク／＼刺されるやうな氣がするよ！」

其の言葉は實に奇怪な事のやうであつたけれど事實であつた！

フアンドールも聲高に言つた。

「電氣かしら？……」

彼は事實電機に觸れて、指頭や、四肢に電氣を感じた事を覚えてゐた。彼は今さう云ふビリ／＼とする感じを感じてゐた。けれども暗中には少しも光が閃めかなかつた、そして空氣が重苦しくなつてくるやうで、埃が朦々と立つてゐるやうで、肺の一動毎に鼻の穴や唇の上に凝結するやうな氣がするのである！そして聞えぬ程にぶうんと云ふ呻りが聞えた。

ジューヴは再び懷中電燈を點けようとしたが、なか／＼點かなかつた。

其の微かな光で、ジューヴとフアンドールとは同時に其の音と其の音の出る物を見分ける事が出来た。

其れは砂だつたのである！

細かな砂の雨が夥しく天井から降つて來るのであつた。

二人は忽ち來るべき恐しい事件を洞察した。

『忌々しいな！』とフアンドールが呟いた。

『生理だ！』とジューヴも落膽して嘆息した。

二人は悲惨な、恐しい數分間を過した……

彼等の周圍には次第次第に砂が積つて行つた！……

流石絶大な勇猛心のあるジューヴも、徒らに青年記者の心を安んじさせるために努めるばかりであつた。

『此の部屋へ砂を詰めて、僕等を生理にするには、澤山に砂が要る。もう直きに止むよ……』

けれども砂の嵩は次第々々に高くなつて來て、小さな蓄電機を成るべく儉約してゐた懐中電燈の間歇的な光で見ると、天井迄も機械仕掛で段々下つて來るやうに思はれた！……

或時間迄來ると、フアンドールの振擧げた腕が其の天井へ届く迄になつたのである！

それは幻想ではなかつた、二人はめちやくくに壓潰されて了ふのである！

『後生ですから、後生ですから、此麼死様をさせないで下さい。僕を擊殺して下さい！』とフアンドールが呟いた。

探偵は答へなかつた。

彼は檻の中の猛獸のやうに行つたり來たりしてゐた。最初驚きの爲めに立竦んでゐたジューヴは、今言はふ様ない憤りの勃然として湧起るのを感じてゐた。

彼は握拳で壁を叩いたり、家具を揺つたりして、必死になつて出口を探し求めた……

「畜生め！ 奈何でも出なければならぬぞ……さあフアンドール君！……僕に手を貸し給へ！……」

ジューヴは椅子を引摺んで、全力を籠めて扉に叩きつけた……扉が破れるだらうか？

椅子は扉に當つて碎けたが、扉は長い餘音を殘す金屬の音を發したばかりである。昇降室が鐵で出來てゐる事は紛れも無かつた。

其の壁を破らうとするのは狂氣の沙汰である！

「砂洲を防がう！」

探偵はテーブルの上へ椅子を一脚上げた。

「登り給へ……此れで砂はかゝりやしないだらう？」

けれどもフアンドールはもはや諦らめて了つて、部屋の片隅に凭れかゝつたまゝ頭を振つた。

彼は尙ほ次第に下降して來る天井を指示した。

「砂を浴びぬようにする事は出来るでせうけれど……どうせ壓潰されて了ひますよ……どんな道具を當てがつてみた所で、支へる事は出来はしません……此の床迄降りて來る仕掛なんですもの……」

ジューヴはフアンドールの見てゐる方を眺め遣つた……

尙ほ下降してゐる天井は、成程、今もう彼の頭上一二寸の所迄來てゐた、探偵は本能的に背を屈めた。

其の時斗りは流石に比類無い勇者ジューズも、萬事休矣だと觀念した、彼は涙を一ぱい湛へた眼で、半身を砂に埋められ、眼を血走らせて動きもやらぬ青年記者を見成つた。

探偵は一つ長大息をすると、ポケットを探つて拳銃を取出し、友人の恐しい臨終の苦痛を除いてやらうと決心した。自分の命もはやこれ迄であると覺悟した。と其の時突然恐しい大きな音がした……

ジューズは中心を失つて顛覆りさうになつたが、光よりも疾く、一跳びにフアンドールの方へ飛んで行つて、其の體を抱き止めた……

何事が起つたのか？……

砂の嵩が急に減つて了つたのである！

狂氣せんばかりであつた二人は、何事が起きたのか解らないが、自分等の周圍を大きなものが走り廻つて、何かの穴の中へ鋭い音を立て、滑り落ちて行くのを感じた。と同時に新鮮な濕つた空氣が二人の胸に入つて來るのを感じた。

確かに外部との交通が突然出來たのであらう。

ジューズは懷中電燈を點じた。

二人から三尺許り先に、暗い穴が開いてゐた。其の穴の中へ砂の流が早瀬のやうに落ちて行くのである。探偵が其の穴を覗いて見ると、突然彼等の脚下の床が落ちて、ジューズはフアンドールを引張つたまゝ、其中へ陥没した！……

「フアンドール君！」

「ジューヴさん！」

彼等は互ひに呼び合つた！ 二人共生きてゐた！

彼等が暗中で、譯も解らぬ場所であつた言葉の中には名状し難い喜びが籠つてゐた！

呼合つて見るとジューヴとフアンドールとは偶然にも並び合つてゐた事が解つた。抱き合ふには腕を伸すだけの事であつた。自分等の身の上が奈何なる事やら解らぬながらも、互ひに生きてゐたと思ふと嬉しさの餘り、泣きながら先づ相抱合つたのである！

けれども妙な感じがするので吾に返つて見ると、二人は膝節迄水中に浸つてゐたのであつた。

二人の四肢の端々迄襲ふ冷たさと水音とは、少しの疑念をも餘さなかつた！

ジューヴは突然叫んだ。

「解つた！」

「何が？」

ジューヴの聲は再び沈痛になつて來た。

「助かつたんだ！」

探偵は凜とした聲で、絶大な沈着さで、日頃の元氣にも似ず次第に疲勞してゆくフアンドールを抱締めて説明した。

「悪黨は勘定違をしたんだ。唯精巧であるにはあつた。奴は科學者で工學者に相違ない！ 見給へ、フアンドール君、吾々の助かつたのは此の砂のお蔭なんだよ。此のフロシヨール長屋の悪漢が捕鼠器をかける様に僕等を押込めた此の昇降機の書齋の床板は非常に薄いのだ。そして其の床板は昇降機の運轉の終る迄極

めて脆い天井の上になつてゐたのだ。其の天井が破れたものだから、砂諸共に地下室に轉がり込んだのだ。此れには少しもロカンポールらしい所は無ないよ。フロントマらしい所も無い。下水は、ピガール廣場の下水は極く單純なものだからだ、若し僕の考へが間違つてさへゐなければ、縁を傳つて降りて行くとアンタン堤の大下水に出られるのだ……行かう、フアンドール君！ 此處から出るのに一町とありはしないんだ。』

泥の中を歩いて、暗中を探りく進み乍ら、ジューヴとフアンドールとは、探偵の確と見届けた下水の中を進んで行つた。

ジューヴはふと立停つて凱歌を擧げた。穹窿の左壁に支へて行つた彼の手に重ね合はした鐵鎖が當つたのである。それは確かに下水道の外に出る梯子であつて、其の口元には普通重い鐵板の蓋が被せてある筈である。

探偵は巴里の地下の状態に明るかつたので、発見したもの、使途を少しも疑はなかつた。彼は先づ自分から其の梯子に捕まつて、すらくと登つて行つた。穹窿の頂に着くと、ジューヴは肩で一突うんと突き上げ、それに違たくましい腕を當て、重い鐵板を押し上げ、外へ首を出して見た。そして街上に飛上るとフアンドールに手をさし出した。

一瞬間にして彼はフアンドールを外へ引上げた。

二人は疲勞と安心とでがつかりして、其儘往來へべつたりと倒れて了つた！

フアンドールが正氣づいた時には、薄暗いがらんとした部屋の擔架の中に寢させられてゐた。最初は茫然としてゐたが、やがて頭が明晰して來ると、ジューヴが熱心に何か瀕りと心配らしく談してゐる聲が聞えて來た。

段々視覚の明瞭になつて來る眼で、フアンドールはジューヴの話相手が巡查達である事を見た。

彼等は黙つて頭を振つてゐた、すると手に手錠を嵌められてゐるジューヴが威猛高に怒鳴つた。

「君達は馬鹿者共の寄合だな、僕等が強盗だと？ 實に馬鹿氣切つてゐる……僕はジューヴだと言つてゐるぢやないか、警視廳の警視だと言つてゐるぢやあな
いか……」

十二、ジヨゼフィンを追跡して

警官等は囚人の身分が解ると、其の縛しめを解いた。

ジューヴとフアンドールとが警察から出ると、探偵は親しげにフアンドールの腕を取つた。

「急いで行かう！ 詰らない目に會つて大事な時間を潰して了つた……」

「全く！……」フアンドールも足ののろい男では無かつたのでジューヴの歩調に合して歩いた。『ですが不平を言ふ所ではありませんね、生還する事が出来ぬ様な冒険の限りを盡したのだから、引張られた位の事はまだしも天に感謝しなければなりませんさ……』

「此の冒険はかなり高價かつたね。危く探偵の名譽を臺無しにする所だつたん

だものねえ……」

『探偵の名譽？……大袈裟な文句ですなあ！……』

『全くだよ、フアンドール君！……僕等は弄られた上に、一寸考へれば解る罫にまんまと懸けられたんぢやないか！ 僕は昨夜シャレツクの家へ行く道で、奴に不意討を喰はせるつもりでゐたんだ……所がそれは思ひ違ひだつたんだ！ ……不意討を喰はせる？ ふん、向ふぢや僕等を待つてゐたんだ……そして僕等にまんまと一泡吹かせたのだ……』

二人は人通りも少なければ車も通らぬ静かなロシユフコール街を降つて行つた、でシャレツクが自分等を尾行して來たとしても、監視されたり、探偵せられたりする憂無しに、平氣で話をする事が出來た……

サン・ラザール街に着くと、探偵はとある酒場を見付けた。尋常な店付で、

人氣は少しも無かつた。

『入らう！ 役所で出される辨當は衛生的ではあらうけれど、どうも物足り無い。腹が空いて死にさうだ……此れから難儀をしなければならぬのだから、力を養つておかうぢやないか！……』

二人は背を壁に向け、扉口の方を向いて、酒場の奥に陣取つた。

『此處にゐれば入つて來る奴が皆んな見える。』とジューヴは言つた……

そして其の好位置に満足して、拳でテーブルを叩いてハムにパンに葡萄酒を一本注文した。

フアンドールはものを言はず此のお手輕料理にガツ／＼して取りかゝつた。彼は何度も經驗してゐるので、事件が熟練した手にも餘つた時さか、失敗した時には、ジューヴが質問される事を好まないのを知つてゐた。而も探偵は苦い

蹙面しがみつきをしてゐて、只管たゞすらく喰ふ事ばかりにかゝつて、話はなしをしようとする素振そぶりさへもしてなかつたのである……

けれども、ジューヴは乾酪かんらくを註文ちゅうもんした時とき、フアンドールに向つてかう言いひ加へた。

『これどうまい晚餐ばんさんの時迄辛棒しんぼうが出来できるね……』

青年記者せいねんきしやは思おもはず尋ねかけた。

『貴方あなたはシャルレックが何處どこにゐると思おもひますか？……ラリボアジェル病院びやういんには歸かへらないでせうね？……』

ジューヴは微笑びしょうした。

『馬鹿ばかな事ことを言いひ給たまへ。勿論もちろん病院びやういんには歸かへりやしないさ！……何處どこにゐるかつて言いふんだね……それや尙なほ難むづかしいや……肝腎かんじんな事ことは何處どこにゐると云いふ事ことさ……

：僕等ぼくらが彼奴きやつを追おつて行く何處どこかにゐると言いふ事ことだけは受合うけあつておくよ——僕等ぼくらと言いつたのは、君きみも一緒いっしょだと思おもふからだ——だが僕ぼくにも計畫けいかくがあるんだ、さあ、一つ君きみの健康けんかうを祝しゆくさう！』

フアンドールは探偵たんていのコツプに自分じぶんのコツプを打合うちあはせた、そして探偵たんていの諸諺しよげんと、其その悠然いゆうぜんとした態度たいどと、最近さいきんにシャルレックを發見はつけんするに到いたるやうな確信かくしんとに驚おどろいて更さらに尋ねかけた。

『計畫けいかくがあるんですつて？……どんな？……』

けれどもジューヴ探偵たんていは手振てぶりでそれは言いふ事ことが出来できないと答こたへた。酒場ばりの主しゆ人じん——此この時とき候かうの寒さむいものにも拘かはらず、シャツ一枚まいになつて、古風こふうな胸前むなまへ掛かけをしてゐる中風病ちゆうかぜみの大男おほをとこが、帳場ちやうばの床几しやうぎを筋張すぢはつた胸むねに抱かへて來きて、其その上うへに登のぼつて、店みせを照てらす唯一たひつの瓦斯がすに火ひをつけた。折をりしも五時ごじを報ほうずる時計とけいの音おとが

して、街はまだ眞晝間であるのに、家の中は早や暗くなつて來たのである。亭主が其の腰掛から降りて、帳場臺の向ふの以前の場所へ戻り、其の上に兩手をついて夕餉時に必ず流れ込んで來る客を待構へてゐると、ジューズは自分の前にある食殻を押し遣つた。

『僕の計畫が聞きたいのかい、フアンドール君？……ふむ、本當を言ふと、君に言ふが如き計畫ではないのだよ。ね、僕等は今まだ何にも知らないのだ。ルパールも發見されない……ね……彼奴がシャレツクと通じてゐる關係もやはり不可解だ……それにフロシヨウ長屋の殺された女の本體もあの殺人の目的も、皆無知らないのだ……それから又此の三日中に吾々の眼前に行はれた總べての事件、總べての事實に就いても、論議するまでも無い事として見る事を得るものは唯一つきりで、而もそれは現在と既に此の事件の過去となつてゐる事とを

繋いでゐる唯一の連鎖だけなのだ……此の事、此の事實、此の連鎖、それはラリボアジエール病院にジョゼフィンがゐると云ふ事なんだ。僕の判斷に従つて行くと、ジョゼフィンはルパールの情婦である、ルパールはシャレツクを知つてゐる。殺人が行はれたのはシャレツクの家だ、吾々が埋没されようとしたのも彼奴の家だ……けれどもシャレツクは逃亡し、ルパールは消え失せて了つた……其の代りにジョゼフィンのゐる處が解つてゐる……だから論理的に吾々が興味をかけてゐる人物を見出さうと努めなければならぬのは、あの女に依つて求めねばなるまい。』

『それやさうですね。すると僕等はジョゼフィンを監視して、あの女を圍にするんですね？』

『さうだ、だが君の忘れてゐる事が一つある。それはジョゼフィンが病院にゐ

ると云ふ事だ、病院ではルパールもシャレツクも目前あの女を狩出さうとはしないだらうからねえ！』

『さうですね、併しジョゼフィンを病院から出したら奈何でせう？』

『君にさう言はせたかつたのだよ。ね、ファンドル君、ジョゼフィンが病院で治療してゐた日には、監視をしてゐた所で何等得る處は無いが……出た以上はもう眼を放す事は出来ないよ……』

『で何時出してやる積りなんですか！ 院長は昨夜其の事を何とも言ひませんでしたか？』

ジューヴは返事をせず、拳でテーブルをコツ／＼と叩いた。

『お父さん、書くものを貸しておくれ、そして勘定をしてくれないか。』

五六回無益な試みをした後、料理屋のペンでは書く事が出来ないので、貧弱

な筆で我慢しなければならぬ事が解ると、ジューヴは自分等の調査の到着したと思はれる確かな點をファンドルに説明する丈で我慢した。

『僕はジョゼフィンがもう長く病院にはゐないと思ふのだ。あの娘は自分の情夫が自分から逃れたいと思つてゐる譯を、すつかり了解してゐなければならぬと思ふのだ。そして其の心の底には、あの娘がそれを望んでゐないと断定されるものがあるのだ……自分に發砲した者はシャレツクであると云ふ事を、あの娘は疑つてゐるのだらうか？ さう云ふ事は無さうだ……娘はシャレツクを知つてゐる。あの單純な心中で、どのやうな事でもしかねないと思ふ事を知つてゐる。ラリボアシエールに来て、復讐しようとしたのは彼であると思ひ込んでゐるに相違ない……で必ずあの娘が今、病院を出たいと思つてゐるのは極り切つた事だ……だから……』

「だからルパールに會つて自分の心變りしてゐない辯解をしに歸ると云ふのですね?……」

「其の通りだ!……そこで僕等はいかうしようと思ふ。僕はこれから直ぐ警視廳へ行つて、僕の歸廳しなかつた次第や、此の度の事件を話して總監に充分報告をして來る積りだ……君は其の間に病院へ行つて貰ひたい、此處に院長への依頼がある。これで院長が君の言ふが儘にしてくれるだらう。ジョゼフィンに會つて、必ず病院を離れさせないように監視してゐてくれ給へ……そして僕が行くのを待つてゐてくれ給へ、遅くとも二時間のうちに行くから。」

そしてジョーズは、ジョゼフィンを追跡して、ルパール自身であらうと、又は彼奴の間隙であらうと、誰れかに何處かで出會さないやうなら、それこそ實に奇怪な事だと結論した。

ジェローム・フアンドールは無駄な言語を費す事を好まなかつた。探偵が斯く話し終るか終らないうちにつと立上つて手をさし伸べた。

「承知しました。僕を信頼して下さい! 貴方の信頼に必ず副ふように致します、ジョゼフィンを逃がしはしません……では早速……」

青年記者が早や出て行かうとしたのを、ジョーズ探偵は呼戻した。

「待ち給へもう一言……若しか何かの理由で病院を離れねばならなくなるとか僕に會ふ用でも出來た場合には、僕へ電報を打つてくれ給へ、否、誰かに打たせてくれ給へ、警視廳四十四號室僕宛にだ……其の電報が何時でも僕の手が届くやうにしておくからね……明日の日曜日にも。」

彼には危険に慣れてゐるので平然たるものがあつたけれど、フアンドールは追がに探偵と握手をする時感情の昂つて來るのを禁じ得なかつた。ジョーズの

最後の言葉に煩はされたのである。

兎も角も二時間のうちにはまた會へるのだと彼は考へた、けれども其の短時間のうちにも起り得る事件を豫想した。ジューヴとフアンドールとが、果然計畫した通りに再び相會する事が出来るか？

……併し青年記者もさう云ふ不吉な考へに久しく鎖されてゐるには、餘りに剛毅濶達であつた。最後の握手をしようと、彼はジューヴ探偵に別れてラリボアジエール病院の方へ志して行つた……

十五分もするとジエローム・フアンドールはアンブローズ・バレ街を曲つた。其の時通りかゝつた一人の女の前の横切ると忽ちはつとして息を詰めた。……『訝々ッ！……これは俺の用心も及ばないぞ！……』

何事があらうと、彼も流石に歩調は改めなかつた、そして尙ほ五六歩行き過ぎて、向ふが氣がつかなくなつたらうと思つてくるりと向き直ると、後戻りをして、今通り過ぎた女を稍久し見詰めてゐた……

『うんあれだ！ だが夢では無いぞ！ 少しの疑も無い……』と彼は考へた。……其の女はシャベル通りをバルベ通りの方へ進んで行つた……フアンドールは其の女の後を跟けて行つた……

ラリボアジエール病院の玄関を飾つてゐる大時計が、今し六時を報ずると、いろ／＼な病室には何時もと同じく往つたり來つたりする足音が、夜の支度を終へた看護人や看護婦の行つたり來つたりする足音がした。

病人達が五時半に供せられた食事をした所であつた。遠くの廊下ではまだ、

食事の時に皿だの椀だのを載せて部屋々々を通る車の音が響いてゐた……

パ―テル病室でも毎日行はれる助手の廻診が終つた。彼は或る患者には長い處方を與へ、診察する必要の無い或る患者には、心易げな言葉をかけた。

『奈何ですね、食欲はありますか？……よく眠るようになさい！……明日はすつから全快しますよ……』

すると患者達は其の少しの言葉で満足し、若い醫師の注意に安心して禮を述べた……

大廣間には患者の枕を叩く單調な規則的な音がした。それから又寢臺から寢臺へ小聲で話をする聲、そして隣りの人々と取り交す休む時の挨拶をする聲がした。

廻診は今や終らうとしてゐた。助手は最終の寢臺へ來た。

『おや、貴女は出て行くのですか？』

醫員は其の寢臺に腰かけて、少しも寢ようとする風のない若い女に向つて言つた。

『はい。』

『では此處がお嫌なんですね？……』

『いゝえ、ですが……』

『ですが、奈何したんです？……やつぱり怖いんですか？……』

『いゝえ、そんな事はありませんわ！……』

病人が餘り平氣な調子でさう云ふので、醫師は思はず微笑した。

『僕があなたのやうな場合になつたら、そんなに平氣ではられませんかねえ……奈何しようと言ふのです？……此處を出て何處へ行かうと思ふのです？』

ね、まだ貴方は夜歩きなどしては不可ませんよ、貴方はまだぐ弱つてゐるんだから、明日の朝、廻診後に、十一時にお出なさい！ 其の方が本當ですよ……」

若い女は頭を振つて明瞭に答へた。

「先生、妾退院したいのですの……」

「先生は諦めると忽ち冷淡に

「宜しい！ 退院證をあげます。」

彼は従いてゐる看護婦長に合圖をした。

要するに、彼が兎や角言ふ事は無かつたのだ。

「ねえ、まあ考へて御覽なさいよ」と彼女は退院の支度を羨ましさうな眼をして眺めてゐる隣の寢臺の女に言つた。「妾が今もう一分此處にゐたら、全快する

「ねえ、まあ考へて御覽なさいよ」と彼女は退院の支度を羨ましさうな眼をして眺めてゐる隣の寢臺の女に言つた。「妾が今もう一分此處にゐたら、全快する

「ねえ、まあ考へて御覽なさいよ」と彼女は退院の支度を羨ましさうな眼をして眺めてゐる隣の寢臺の女に言つた。「妾が今もう一分此處にゐたら、全快する

「誰か待つてゐる人があるの？」

「あるわ……あるだらうと思ふわ！……妾がまだ歸つて行かないと、ルパールが承知しやしなからうと思ふわ。」

「あの人の處へ歸るの？」

「まあ！……」

ジョゼフインは當り前の事だと言はんばかりの調子でさう言つた。相手の女にはそれが解らなかつた。

「だつて、妾なら本當に怖いわ、あの人に會ふ事を考へたつて、あなた……あの人に殺されないようにするには、本當に好い時ぢやありませんか？……それを今またあの人に捕まつちや……」

「だつて、妾なら本當に怖いわ、あの人に會ふ事を考へたつて、あなた……あの人に殺されないようにするには、本當に好い時ぢやありませんか？……それを今またあの人に捕まつちや……」

「だつて、妾なら本當に怖いわ、あの人に會ふ事を考へたつて、あなた……あの人に殺されないようにするには、本當に好い時ぢやありませんか？……それを今またあの人に捕まつちや……」

「だつて、妾なら本當に怖いわ、あの人に會ふ事を考へたつて、あなた……あの人に殺されないようにするには、本當に好い時ぢやありませんか？……それを今またあの人に捕まつちや……」

「だつて、妾なら本當に怖いわ、あの人に會ふ事を考へたつて、あなた……あの人に殺されないようにするには、本當に好い時ぢやありませんか？……それを今またあの人に捕まつちや……」

けれどもジョゼフインは快く打笑つてゐた。

『あなたは自分で言つてゐる事が解らないのよ……ルパールが妾を殺さなかつたのは、殺したくなかつたからなのよ……あの人は射つ事が上手なんですよ……妾だつて憤つちやゐないわ……あの人が妾の體に穴を穿けなかつたのは、さうしたくなかつたからだもの……それに妾を此處へ入れておきたくなかつたのも、あの人の方が尤もだわ、妾あの人の仕事を知らなかつたんですもの……あの人に聞いて來なかつたのが悪かつたわ……』

監督の強く制止する聲に若い女は口を噤んだ。

患者達は晩の廻診迄は自由に話をする事が出来たけれど、醫員が行つて了ふと黙つてゐなければならなかつたのである。

眠らねばならぬ規定であつた……

けれどもジョゼフインは着物を着終つた。看護婦がジョゼフインの入院する時に着て來た衣類を持つて來た。彼女は悪い印度服を着けて、コルサージュを着込み、瞬く間に釦を嵌め、二搔して髪を均し……すつかり支度をして了つた！……

あ、若い女には退院がどんなに嬉しかつたらう！そして鼻唄をうたひながら大階段を降り、庭を通つて、門番小屋に出た。

『退院致します。』と彼女は退院證を門番にさし出しながら大聲に言つた。『退院致します、有難うございました！……もう此の病院には來ないようにしますからまた會ひます迄（別れの時の挨拶）なんて事は言はない事にしますよ……』

『さうともさ……それや解つてゐますよ！病み上りの人を止める法つて無い、わさ、取分け土曜日の晩なんかはねえ……一週間のお仕舞で大祭りをやらかす

のだもの。はつはつは！……土曜日はお前さん、大騒動の日だもんのう……」
 門番はさう言つて打笑つた。彼は退院する男女に何時もこんな冗談を言ふ癖であつたのだ……彼はかう云ふ恩義を知らぬ手合が、自分の病氣を看護して貰つておきながら、病院に嫌な思を抱いて歸るばかりである事を知つてゐたのである……

街へ出るとジョゼフインは足早に歩いて行つた。彼女は何時だらうと思つて停車場の時計を見た。無論もう遅くなつてゐた。

彼女はアンプロアズ・パレ街を取つて、外廣場へ曲つて行つたのである……

酒盛の時間が過ぎ、食事の時間が近づくと、シャベル街の下層街は大騒ぎの絶頂であつた。男女の職工は工場からずつと前に退けて來た、珈琲店では客を

送り出した……歩道には宿に歸るのや馴染の家へ行く職工達が群がり歩いてゐた。

『あの女が歸るものとする、』とアンプロアズ・パレ街で見た女を尙ほも後を跟けながらフアンドールは考へた。『あの女が歸るものとする、此の群集の中で彼奴に見現はされ、感づかれようものなら頗る拙い……けれども俺の方では彼奴を知つてゐるけれど、彼奴の方では俺をこれ迄見た事も無いのだ。』

此の考へに安んじて、青年記者は可なり女に近く寄つて尾行して行つた。

『外廣小路、それからバルベ廣小路……さうだ、紛れも無くグット・ドール街の家へ行くのだ……』

暫時するとジョゼフインは事實自分の家に着いた。彼女は途中門番にお休みなさいなどと挨拶した、そこでフアンドールは賢くも歩度を計つて、小刻みに

入口の門の邊迄行つて、何喰はぬ顔でジョゼフィンが階段にさしかゝつたのを
見届けた……

「占めた！ 鳥が巢に歸つたぞ、彼奴を訪ねて来る奴を見逃さないようにしな
くつちやならない……」

ジョゼフィンの家の前には、一軒の酒場が開かれてゐた。フアンドールは其
れへ這入つて行つて、

「書くものをくれないか？……」と頼んだ。

「ジュエヴさんに手紙をやるでしょう。眞先に通る馬車に言ひつけて警視廳へ
やらう……遅くとも四十五分間には吾々が合同して網を張るのだ……」

フアンドールは手紙の四枚目にかゝると、ふとジュエヴに充分に知らせてお
きたいと思つたので、探偵が部下を潜ませておく事の出来る近所の店やあらゆ

る種類の小賣店などを示す詳細の地圖を書きにかゝつた……其の時ふと頭を擧
げて見て愕然として驚いた。

『オヤツ！ あれは何だ？』

彼は卓上に銀貨を一枚投げ出すと、其の氣前の好いのに呆れて驚いてゐる亭
主には眼もくれず、急いで其處から立出でると、壁にへばりついてバルベ廣小
路の方へ降りて行つた……

『見違へるやうになつちまつたな……だが確かにあの女だ！……』

フアンドールは監視する女を見失はないで、市街鐵道の停車場迄來た。

「何處へ行くんだらう？……一等の切符を買つた……オヤツ！ シャレツクと
逢構をするのかな？……否、馬鹿な事だ……併し……？」

彼も同じく女の後から切符を買つて乗降場へ出た。

「行く處へ行つてやらう！……だが何處へ行くのだらう？……」

ルパールの情婦は全く巴里女の意氣な姿をしてゐた。此の女が工女の單純で質素な衣類を着てゐながらも尙ほ綺麗に見えるのは、着こなしが巧みで、自分の馴れぬ化粧法などには少しも煩はされなかつたからである。其の夜彼女は翼のついた大きな帽子を冠つてゐた。それが其の房々した褐色の髪を陰らし、額を暗くし、眼を深く見せ、其の瓜實顔を引立て、見せてゐた。質素ではあるが巧く裁つた水色の服はしつくりと身に適つてゐた。穿いてゐる靴は踵が高く彼女の華奢な足の線を描いてゐた……そして市街線のリヨン停車場から降りた美人を、暫時前にラリポアジェル病院を出て來た飾屋女工だとは誰も認める事は出来なかつたらう。

あゝ、永遠の美女よ！ 巴里の女の特種な特徴よ、數分間にして、單純なミジイ女にも、亦富裕な貴婦人にも、其の美しい容止を完全に變化し得る唯一の婦人達よ！ ジョゼフインの美容はそれ程際立つてゐた。巴里女は暖かに仄暗い夕の色の中に實に可愛く、なよやかで、彼女に擦違つた男達は嘆美の眼を瞠らない者はなかつた。誰一人冗談を言つたり、輕口を利いたり、氣を引いて見るやうな事をする者は無かつた……

ジョゼフインがリヨン停車場とジドロ廣小路を分つ大廣場へ、躊らふやうな足取で五六歩歩き入るが否や、かなり粗末な風體をした若い男が一人彼女の方へ進み寄つた。彼はちつと女を打見成つてゐたが、聽て聲に親しさを籠めて、

「一寸話したい事があるんですがね……斷りつこなしですよ……」

「だつて貴方……」

「たつた一言だけ、必要な事を一言だけ……」

ジョゼフインは躊躇ふやうに見えた。

「では言つて御覽なさい。」と彼女は道傍に立停つて言つた。

「いゝえ、此處ぢや不可ません、一寸食事でもしながらにしませう？」

女は決心した。

「貴方のお好きな様に……」

二人は近所の酒場の方へ行つたが、彼等の後に従つて其の酒場へ一人の男の入つて行つた事には、若い男もジョゼフインも氣がつかかなかつた……

併しフアンドルは店の外へは腰かけなかつた。彼は此の二人の男女の鏡に映るのを監視する法を目敏く発見して、酒場の中へ入つたのである。

「扱、彼奴は何だらう？……」と青年記者は考へた。「ジョゼフインは彼奴と媾

曳をするのだつたのかな？　すると彼奴はルパールの手下かな？……併しジョ

ゼフインは彼の男を知らないやうな様子だつた！……オヤ〜！……」

ジエローム・フアンドルは立上ると勘定をして其の酒場を立出でた……

青年記者の急いだのは無理も無かつた。給仕がジョゼフイン達の占めてゐる

食卓へ酒を持つて來た時、若い女は突然立上つて、蔑すむやうに肩を搔やかすと、挨拶もせず停車場の方へ歩き出したのであつた……

フアンドルはテラスの前を巧みに通り抜ける用意をした。彼は珈琲店の給仕が取り残された男に冗談を言つてゐるのを耳にした。

「あの御婦人は融通が利きませんな……え？……」

「うむ、利かないな！……忽ち斯くの爲體さ……」

そして尙ほ沈んだ調子でかう其の男は言ひ加へた。

『馬鹿々々しい！ 色男臺無しさ！……』

フアンドールは考へた。

『成程、これですつかり解つた。ジョゼフインは彼の馬鹿者がルパールか誰かの使だと思つたものだから、彼奴の言ふ通りに跟いた來たんだ。所が彼奴の心がよく解つて見ると違つてゐるので、急に出て行つて了つたのだ……あつはつは！ だが此奴は面白かつた！ 所で彼奴があんな女の期待してゐた者で無かつたとする、誰を待つてゐたのだから解らなくなつて來た……』

ジョエローム・フアンドールは十五六間後からリイヨン停車場の出發場へ行く坂道を、荷物を積んで登つて行く車の蔭に身を潜めながら、面白い事に出會ふに違ひないと思ひながら、女の後を跟けて行つた……

けれどもジョゼフインには急ぐ様子も見えなかつた。彼女は何度も大時計を見て、其の度毎に次第に足取を緩めた。彼女はお客の拂ひの足りないのを談判してゐる馭者を一寸足を停めて見てゐたが、やがて停車場迄登つて行つて待合室に入つた。

彼女は圖書室の硝子戸に張出されてある繪入新聞を見て、それから入場券を賣る窓口へ行つて切符を買ふと、食堂へ登る階段の下においてあるベンチへ行つて腰かけようとした。

ジョエローム・フアンドールもそれに續いて同じく切符を買つた。

『見られないようにして、見張つてゐられるには何處が好いだらう？……うむ！ あるく！ 階段へ登るのだ！ あんな女の上になる、あいつの言ふ事も聞えるだらう……そして誰かと話をするのに、頭を揚げるやうな事はあるまい……』

ジエローム・フアンドールは荷物車の蔭に隠れてジヨゼフインの前を通り越した。そして階段を登つて手摺に臂をかけた。

彼の姿を見付けた給仕が一人飛んで来て彼を部屋へ案内しようとしたのを、彼は『待つてゐる人がある』と言つて胡麻化して、煩はされないように『珈琲を拵へてくれ!』と言ひつけた。

ジエローム・フアンドールが其の監視點に達して五分も経たないのに、彼は直ぐ又心配して考へ出した。待疲れてジヨゼフインが場所を變へやあしないだらうか——さうなると監視するのが小面倒になつて来る——其の時粗野な顔付をした男が若い女に近寄つて来た、女も立上ると男はせか〜と語り出した。

『彼奴が屹度待つてゐた男だな。荷物を下す爲めに車の後から走つて来る奴のやうな歩き付だ……うん、解つた、ルパールの手下なんだな! 併しジヨゼフ

インが會はふとしたのが彼奴だとすると、何故ジヨゼフインが態々化粧なんどをしたんだらう?……』

フアンドールの凝視してゐた男はポケットから皺だらけの帳面を一冊取出した。彼はそれをめくつて、一枚の紙を取るとジヨゼフインに渡して、巧みに女の手提袋の中に入れさせた。

ジエローム・フアンドールは呆然とした……

『あれは奈何云ふ事だらう? あの野郎め、ポケットに一等の切符を持つてゐやあがる?……はてな、それではジヨゼフインが旅に出るんだな?……何處へ行くんだ?……あの男が何故切符を渡したんだらう?……』

男はジヨゼフインに既に旅客の乗つてゐる列車を指した……

『マルセイユの列車だ? 畜生め! それではルパールの奴巴里をはや逃げ出

したのだな？……えゝ！ 確かめてくれるぞ……」

フアンドールは赤帽を呼んだ。

『至急一等の切符を買つて来てくれ給へ。マルセイユ行だ……お金は此處にある……乗降場の入口に持つて来てくれ給へ……其處で待つてゐるからね……解つたかい？ さうく！ 此處に電信局があるかね！ 遠く無い所に？……』

『降車場にムいます……』

『さうかい、では電信を一通持つて行つてくれ給へ！……そして直ぐ歸つて来てくれ給へ！……』

ジョゼフィンの相手は立去つた。若い女は繪入新聞を見た後、マルセイユ急行列車が停車してゐる乗場に出た……

『まだ十分間がある。』とジョゼフィンの乗込んだ車室を見ておいたジエローム

フアンドールは考へた。

彼は車の横手に手帳を押しつけて、急いで電報を認めた。

警視廳、第四十四課にて、ジューヴ警視。

ジョゼフィンに出會ひて尾行せり。彼女はマルセイユ列車の一等車にて出發す。何處に行くや不明なれど、同じく切符を求めて同乗す。變事あり次第打電すべし。

十三、衝 突

「切符を拜見致します。」

檢札員はフアンドールのさし出した切符を見た。

「失禮ですが、間違つて居りますよ！」

「ぢや此の列車はマルセイユへ行かないんですか？」とフアンドールは驚いて尋ねた。

「列車はさうですけれど、貴方の今乗つてゐらつしやる此の後部の車は行かないのですよ、これはポントアルリエ行なので、ジッヨンでマルセイユの急行と切放されますよ。」

フアンドールも答ふるだけの事は出来た。要するにどうだつて構はないのだ

彼の觀察點から見れば、マルセイユへ行かうが何處へ行かうが、隣りの車室に乘込んでゐるジョゼフィンを跟けてさへ行けばそれで好かつたのだ。

檢札員は青年記者の黙つてゐるのを誤解して、丁寧に教へた。

「途中で御面倒をなさるより、今直ぐお代りなすつた方が好うムんすよ、お急ぎなさらないと、發車致しますよ……」

フアンドールは檢札員の言葉に少し閉口したが、此の車室にゐる理由を知られたくないので、あやふやな様子をしてゐた、そして此の親切な鐵道員から逃れる爲めに、

「汽車が出てから他の車に代りませう、廊下があるので容易でせう。」
すると檢査員はまた言つた。

「所がそれが出来ないので。マルセイユへ行くと、即ち此の列車の前部にあ

る列車は打通しになつてゐますけれど、後部の列車とは貨車で分れてゐるんです。」

「さうですか、ちや後で、夜中になつたら代る事にしませう。ジョヨンまでは好いでせう？」

「ジョヨン迄は好うムいます。」

檢札員は立去つた。フアンドールはふと考へた。

「ジョゼフィンも間違へて居りはしなからうか？ 途中で他の列車に移らねばならなくなりはしなからうか、それともスイス國境の方へ行くので、ジョヨンでマルセイユ急行から分れる列車へ、態と乗つたのではあるまいか？」

丁度檢札員はジョゼフィンの車室で切符を改めてゐた。

フアンドールが其の方へ身を寄せで窺つてゐると、ジョゼフィンと伴れの男

の、會社の出張員との間に交される話の末が聞えた。

會社の出張員が身を引きながら言つた。

「全くですよ、面倒がありませんよ。」

少しも解らない言葉だ。併しフアンドールはそれを翻譯した。

「二つのうちの一つ、ジョゼフィンが後でジョヨンで降りるかもつとすつと乗通して行くからだ。降りるなれば他の車にゐた處で又此の車にゐた處で差問はない、乗通すのならボンタルリエ線なんだ……外國行きだ……孰れ解る、要するに切符を買足しするだけの事だ！」

フアンドールは列車に乗つた時迄、ジョゼフィンも亦、女が出發の時に乗降場で出會つて、一緒に乗込んだ新しい同行者をも敢て見ようとはしなかつたが此の時車室に通じてゐる廊下を利用して、上流婦人の様な風をしてゐる淫賣婦

と同行する男を竊かに窺つて見る事に決心した。

其れはお金持らしい様子ではあつたけれど、かなり肥つた、かなり俗悪な風體の紳士であつた。相當年配の男で、其の陽氣な顔のぐるりは頸飾式の髻が伸びてゐた。それが彼を船員か栗屋のやうな途方も無い風體に見せてゐた。

それに其の男は片眼であつた。

けれども彼は趣味などは其方除けで、唯贅澤に綺羅を飾つてゐるばかりで、明らかに事業に成功した大商人であつた。

結婚破談の男が、女と旅行に出るのを喜んでゐるやうな、さう云ふ人に見られるのを非常に怖がつてゐるやうな體裁であつた。

ジョゼフィンも其の男に笑顔を向けたり、優しくしたりして嬉しさうであつたけれど、少し氣にかゝるものゝあるやうな様子であつた。男の言葉に返事を

してゐるかと思ふと、急に考へ込んで、峻しい眼付をしたりした。最初好いた同士の遠出だと思つたフアンドールは、此の二人が自分等の本當の意向や本性を隠すためにさう云ふ風を装つてゐるのではなからうかと考へた。

けれども此の二人も戀人達が共通に抱いてゐるやうに、車室に自分等二人だけゐたいやうな様子であつた。二人は孰れも腰掛の上へ誰か自分等の傍へ座らうとする者があつたら、其の亂雜なのに躊躇するよう、繪入新聞だの、停車場で借りた枕だの、埃除けだの、傘だのを取散らけてゐた。

フアンドールは一寸其の間へ割込んでやらうかと思つたけれど思返して中止した。廊下を間違々々してゐるにしろ、其の傍へ割込んでゐるにしろ、ゆるりと彼等を見張つてゐるのには都合が好くないと思つたのである。

輕卒な事をして向ふに氣付かれたくないので、青年記者は二人の車室の方へ

背を向けて、鏡に映る二人の姿を見成つてゐた。

列車は夜の暗の中を轟々と走つて行つた。

今列車はギールヌーヴ・サンジョルジュを通つて、次第に速力を加へ、煙をばつくと吐きながら、汽罐車の竈の石炭の火光と信號燈とを煌めかせながら暗中の田野を疾驅した。

併しまだ全速力に達した疾驅ではなかつた。軌道の多數なのや、支線の多いのや、轉轍の危険な事や、數多の小さな停車場の介在する爲めに、速力を加減しなければならなかつた。

五十メートル行けば全速力が出せるが、それ迄は機關手と火夫とは眼と耳ばかりになつて、巴里の出口や郊外を横斷するのに細心に注意して行かねばなら

なかつたのである。

途中に擦違ふ多くの列車の走る轟然たる響や、汽笛の裂くやうな響が騒然として四邊を壓した。

けれども列車の内部は寂然として静まり返つてゐた……

まだ時間は早かつたけれど、旅客達は出来るだけ安樂に夜を送る心構へをしてゐた。電燈は大部分青い布に包まれ、廊下に出る車室の扉は鎖されてゐて、一同は皆早く眠つて、早く此の窮屈な旅行の一夜を過して了はふして焦つてゐた。其れらの様子を見て熟考し、確かには解らなく共多分遠くへ行くものと思はれてゐたフアンドル自身は行先さへも知らず、ステッキと帽子を印にしておいた自分の席へ、まだ落着いてもゐなかつた。

旅客中、荷物を持つてゐなかつたのは、青年記者唯一人であつたらう。そし

て過ぎ去つた事件や來るべき事件の事を考へて、押へ難い好奇心を燃し、鋭い不安を感じてゐたのも、確かに彼唯一人であつたらう。

一體此の尾行は何時果されるのであらうか？

ジョゼフインの行先を何時突止める事が出来るのだらう？

突然何かの障礙が起つて、自分が遂行を誓約した目的を果す事が出来なくなりはしなからうか？ 此の怪婦人の行動をジョーズ探偵に通知する事が出来なくなつて了ふやうな羽目に陥りはしなからうか？

フアンドールは自分の肩に重大な責任の重荷が懸つてゐるやうな氣がした。

彼は自分の車室に戻らうと思つた。

廊下に向つてゐる兩隅は既に人に占領されてゐた。一隅は口髭を生やした官吏風の四十年配の男に、今一隅は蒼白い顔色をした若い大學生に取られてゐた。

青年記者は監視中他の三つの車室が不思議にも鎖されて了つた事に氣がついた。窓硝子には帷が下されて了つた。で其の中にある人々はもうフアンドールにも見る事が叶はなかつた。

彼は先づそれを憤つたが、それでもそれを當然な事とし、眠るのを急がないうで廊下をぶらつく不作法な人々に煩はされたり、覗かれたりしないようにしたいと思ふ人の當然な處置だと思つた。

フアンドールは席に就いた。

官吏は新聞を讀耽つて、大きな息の音を立てゝゐた。彼の呼吸は重く苦しげであつた。

青年記者は、

『此の男が眠つたら屹度鐵工場のやうに大きな軀を立てる事だらう！』と思は

ざるを得なかつた。

他の場合だつたら、フアンドールも此度不愉快な男からは驚いて逃げ出した事であらうけれど、其の時は眼を瞑らうとさへしなかつた、それどころか斷然眼を醒ましておようとした。

「横にでもならうものなら、此度に疲れてゐるのだから、ぐつすり朝迄眠つて了ふ事だらう。」

事實フアンドールは眼瞼が重くなつて来て、腰が痛くなつて来た。前夜來からまんじりとしなかつたので、眠くなつて來るのも當然の事であつた。

「眼を醒ましてゐるぞ……醒ましてゐるぞ……」とフアンドールは心に誓つた。けれども青年記者は自分の力を餘り過信し過ぎてゐた。

彼が腰を下して十分も経つか經たぬのに、痺れるやうな強い睡魔が襲つて來

た。

成程彼は確かに眠りはしなかつたらう、けれども物事を確と注意する力を失つて了つてゐた。速度の規則的な列車の單調な進行に搖られて、半ば朦朧とした状態に陥つて、夢と現の境すら茫然として知らなかつたのである。

フアンドールは幾度もはつと思つては眼を見開いて、考へを纏めようとしたが聴てまた悪夢に亂れた睡魔に襲はれて眠の中に沈んで行くのであつた。

フアンドールは廊下を怪しげな、奇怪な人々が大勢行つたり來たりするやうな氣がした。叫く聲やどつと囁す聲が聞えた、又が煌めくやうにも思つた。

悪漢共の黑影が彼の心の前を走つて行つた。シヤレツクの顔、ルパールの顔、ジヨゼフインの顔などが腦中に狂ひ亂れてゐた。

聴てふと眼醒めると、まだ昨夜の砂の雨の中にあるやうな、下水の泥水の中

を歩いてゐるやうな氣がして突立上つた！

フアンドールは忽ち跳り上つた。

廊下に通ずる車室の扉をそつと開けて、誰やら自分の方へ進み寄つて来て、自分の體に觸れんばかりに擦り寄つて来たやうな感じがしたのである。

『其處へ行くのは誰だ？』とまだ夢の醒め切らぬ弱い聲で呟いたが、其の聲は汽車の響に搔消されて了つた！……

誰も答へる者は無かつた。

青年記者は廊下に出た。

誰も通つた者は無かつたけれども、車室の端に長い髯を伸ばした一人の男が突立つてゐた。其の男は煙草を燻らせながら、硝子に鼻をくつ付けて、暗い田野をちつと見透かしてゐた。

彼は二歩ばかり踏み出して、ジョゼフィンと伴れの男の入つてゐる車室に凭れて耳を澄したが、何の物音もしなかつた。

青年記者は肩を聳やかして、自分の杞憂を冷笑して元の席へ戻つた。

彼は此處に夢中になるのは、愚な事だと思つた。要するに今の場合は奈何だ

？ 彼は不身持な女を追跡して来た。其の女は情夫と道行と洒落てゐるのではないか。勿論大きな報酬と交換で其の愛情を賣つてゐるのだ。あの男は多分既婚者で、旅行を言ひ立てに妻を欺いて、田舎へ劣情を満足させに行くのではないか。

さう思ふと、ジョゼフィンを跟けて来たと言ふ手前、此の列車の旅客が全部悪黨で、ルパールの情婦の共謀者であると思像したのを、彼は肯じたくなつた。けれども賢くもさう考へた五分後に、フアンドールは又もはつと思つた。人

相の悪い怪しげな風體をした二人の男が、廊下を通るのを彼ははつきりと見たのである。

其の二人の中の一人がフアンドールの車室をざろりと睨んだので、青年記者は心臓がどきどきと鳴出すのを感じた。

フアンドールは同乗者を顧みた。官吏と大學生とは拳を握つて寝込んでゐた。二人だけであつたか？ 否！

フアンドールは細心に窺つて官吏が何等非難を受ける所の無い市民のやうに鼾をかいて居り、大學生はそれよりもずつと淺く眠つてゐる事を知つた。事實大學生は身動きすらもしなかつたけれど、幾度も眼を見開いては身の周りを不安さうな、探るやうな眼で眺めた、そして又監視に氣を取られてゐるフアンドールを見遣つてはうどくと眠り始めるやうであつた。

列車の速力は再び緩くなつて、ラローシュ停車場に入つた。

機關車取換の爲めに停車したのである。まだ十一時十五分前であるのに、停車場は墓場のやうに寂然としてゐた。機關車の息づく音や、驛長の命令や、アスハルトの歩廊に響く人々の重い足音が響いてゐた。

官吏も不意に眼を醒ますと惶て、下車した。

フアンドールはそれを見送りながら、自分一人だけ取残されたやうな寂しい氣がした。

青年記者は同乗者の本性を洗ふ爲めに、一寸の間人を呼びたいやうな氣がした……特殊な役人の旅客を訊問する所を想像してみたりしたが、聽て肩を揺ると自分の馬鹿げた考を起したり、くだらない心配をしたりするのを心の中で嘲笑つた。

彼の計畫を實行したならば、實に面白い事であらう、そして其の不法な調査をさせるのに、彼はどんな動機を役人に提示する積りなのだらう。勿論其麼事は取上げられはしない、がフアンドールの希望通りに取上げられた日には、尙ほと悪い事になるだらう。

それから又其の干渉を奈何して行ふつもりであらう？

全くそれは話の種になる事だ。

ジューヴ探偵を喜ばせる事だ！

機關車が取換へられると、列車は最初は緩く、其の次には速力を加へて進行し始めた。

官吏の出て行つた爲めに車内の様子が變つた。ジョゼフィンと其の伴れの男のゐる車室の扉は開放たれてゐた。妙な事にはフアンドールの隣の大學生が、

自分の席を立つて其の車室へ行つて、大男の眞前に、即ち入口と向合つてゐる車室の奥へ席を取つた。

でフアンドールは唯一人にならねばならなかつた。併し彼は動もすれば眠くなつて來るので、大いに心配した。

フアンドールは眠らないやうにする爲めに、一等車の座り心地の好いクツシヨン捨て、廊下に備へてある腰掛の痛いのに座る事にして、扉の開け放してあるジョゼフィンの車室の眞向ひにある席に就いた。

けれども餘り疲勞が強かつたので、出来るだけ居心地を悪くしたものの、十五分もすると體を二つに折曲げて了ふ程寢込んで了つた……

突然彼は何者かに突飛ばされたやうに、ジョゼフィンの車室のベンチの上へよろ／＼とよろめいて行つた。

不意に夢から醒まされて、車の振動に突飛ばされたのか、變事でもあつたのか、それも解らなかつたけれど、機械的に重心を取直して何事であらうと思つて四邊を見廻した。彼が殆どべつたり腰が落ちさうになつた刹那、ふと眼をあげて見るが否や思はず呀ッ！と叫んだ。

彼の鼻つさきに拳銃の筒先が向けられてゐたのである。其の拳銃をさしつけてゐる男は顔にマスクをかけた大男で、入口に立ちはだかりながら太い聲で命令した。

『兩手を舉げろ！』

フアンドールは、驚いて同じく眼を醒ました同乗者と一樣に、狼狽して了つて成す所を知らなかつた。

『兩手を上へ舉げてじつとして居れ！……少しでも動かうものなら、頭を撃抜

くぞ！』

フアンドールも漸く夢から醒めた。本能的に兩手を頭上に舉げて、事の成行を待つた。

突如彼は叫んだ。

覆面の男と入口の間へ、行動の軽快な地の神のやうな人物が現はれたのである。其の人物も共謀者らしく覆面をしてゐた。二人は孰れも顔に黒の覆面をつけて、人相の解らぬようにしてゐたのである。

列車の響きが高かつたけれど、フアンドールにも廊下で取交される意味ありげな話がよく聞えて來た。

『動くな！』と背の高い悪漢が拳銃で威嚇しながら更に怒鳴つた。

尙ほ同じ舉動と同じ威嚇！

フアンドールも探偵事件にはよく慣れてゐたので奈何云ふ事になるかと云ふ事はよく解つてゐた。古風な、亞米利加風の泥棒に襲はれたのだ！

事實フアンドールは箱乗と云ふ奴は旅館荒しのやうに必要がなければ人を殺さないと云ふ事を、抵抗さへしなれば、無事に済むと云ふ事を經驗で知つてゐた。

フアンドールは心中に怒りながらも手鞆に數枚の級幣の入れてある事を考へて、それが忽ち泥棒達の手に乗はれるのかと思ふと落膽した。

けれども青年記者はさう云ふ物質的な考に止まつてゐられなかつた、自分の前に展べられた光景をよく觀察しなければならなかつた。

悪漢はジョゼフィンを睨みながら言つた。

「貴様は彼方へ行け！」

其の時から不思議に重苦しい疑問がフアンドールの心中に入り亂れた。

此の事件はジョゼフィンド、延いてはルバールと其の悪漢團とに何かの關係があるのだらうか？ それとも反對に唯符合するだけの事であらうか？ さうだとしたら實に滑稽な事だらう！

ジョゼフィンも、悪漢の情婦も、普通の人のやうに泥棒に持物を奪はれた！

彼女の顔を見ても、共謀者であるか否かは解らなかつたが、ジョゼフィンは急いで席を離れて地祇神と大男の間を滑り出て、車の一隅に行つて跣んだ。

フアンドールは彼女に跟いて行かうとしたが、悪漢の拳銃に脅やかされて、自分の場所に立つたまま、動かなかつた。

勿論彼も今に強奪せられるのだ。

彼は何事もしなかつた。

地祇神はジョゼフインの伴れの肥つた男の傍へ行つて、攻勢的な態度を取つて相手を睨みつけながら待つてゐた。

『行れ！』と悪漢團の首領らしく見える大男が突如に聲をかけた。

地祇が驚くばかり敏捷に旅客の上衣やチョッキのポケットを探つた。色蒼褪めた肥つた紳士は怖さにかたぐ震ひをしながら、額にはたらくと冷汗を流して、反対もしないどころか、却つて探り好いようにさへした。そして自分からズボンのポケットを引くり返して四五枚の小錢を吐出した。

瞬く間に時計だの殆ど空になつてゐる手鞆を奪はれて了つた。

彼も勿論其の強奪後には悪漢から免がれる事と思つてゐた、が、悪漢共は拳銃で威嚇して今度は彼を襯衣一枚にして了つた！

フアンドールは何をするのか、何の目的であんな事をするのかと思つてゐた

がそれは直ぐに解つた。

『シャツを取れ！』

『後生です、僕の金は皆んな出してしましましたよ……』

『さあ、脱ぐのだ！ 愚圖々々するな……さもなければ……』
拳銃が低くなつて來た。

肥つた男が致方無くシャツを取つてフランネルの肌着一枚になると、悪漢共は凱歌を擧げた。事實彼の腰の周りには大きな皮帯が巻かれてゐた。

『それを見せろ！ 大方金庫だらう？……』

そして彼が尙ほ躊躇らつてゐるのを見ると、首領は聲を勵ました。

『おい、其の胴巻を取つちまへ！……』

胴巻は肥つた男の腰から取外されて、首領の手に渡つた。覆面した大男は手

で重さ加減を量つて見て中味を推測した。そしてその満足を隠す事が出来なかつた。

而も彼はにんまりと黙笑した。

『此奴は有難いぞく！』と言つてゐるやうであつた。

事實其の胴巻に金貨や紙幣がうんと詰め込んであつたのである。

此の悪事が豫め謀られ準備されてゐた事は疑を容れない所であつた。此の男がマルセイユ急行に乗る事はちやんと解つてゐたのだ。其處で望を果したのだ。で、悪漢共はフアンドールや、一隅に固くなつて、殆ど彼等の眼につかずにゐた大學生などからも強奪する事が出来るのに、氣のついたやうな様子もしなかつたのである。

今追割された肥つた男は大急ぎで服を着直した。けれども餘り仰天したので襟飾を結んでゐるうちに、ごかりと腰掛に腰を下すと、其のまゝ胸が逼つて來

て呟と呻つて氣絶して了つた。

フアンドールは本能的に其の方へ見に行かうとした。と覆面した男が、んと其の肩を叩いたので、直ぐ吾に歸つた。

『動くな！ 打遣つておけ！ 手を出すな、俺が見張つてゐるんだぞ！……』

フアンドールは泥棒の喉へ跳りかゝつて行つてやりたいやうな氣がしたけれど、何よりも引續き追跡を繼續しなければならなかつたので、致方無く服従した。フアンドールの心には唯一つ目的があつた。それはジョゼフィンである。彼はジュウヴ探偵に此の女を追跡する事を約した、その約束を果す事が出来なくなる。あゝ！ 其の追跡が不思議にも突發的な事件で困難になつて來たのだ。臆てまた疑問が起きて來た。此れはルパールの悪漢團であらうか、否か？ そして又ジョゼフィンは共謀者の方へ入れるべきか罹災者の方へ加へるべきだら

うか？

地祇の姿は見えなくなつた、その共謀者も悠然として車の奥の方へ行つた。屹度仲間達に合する爲めであらう。

フアンドールは彼等の退去するのを見ると、此のうづかりしてゐる瞬間を利用して、警鈴を鳴して停車させると好いと考へた。

フアンドールは敢然として此の時機を失してはならぬと覺悟した、それでもそれには大きな危険の伴ふ事を考へた。實際、列車を停車させられるか、又は徐行させられるのを見たならば、悪漢團は斯かる田野の真中で停車する目的を疑つて、亂暴狼藉を働くのに躊躇しない事であらう……併しフアンドールは其麼事で心を翻すやうな男ではなかつた！

現在人が追剝せられて氣絶するのを見ながら、意久地なく指を咬へて引込ん

でゐられようか？

フアンドールは忽ち心に燒金を當てられるやうな憤怒の勃然として湧いて來るのを感じた。

激怒！ フアンドールは愚人のやうに斯の如く愚弄せられ、斯の如く愚かに蹂躪されたのを激怒した。

青年記者は警鈴を探した。それは丁度顔色蒼白な大學生の上の方にあつた。フアンドールは飛鳥の如く其の警報器へ飛んで行つた。がそれに手をかけようとした刹那、突然呀ツと叫ぶが否や顛倒して、手に激しい疼痛を感じた。大學生がフアンドールに飛びついて、其の指を碎けよとばかり嚙んだのである。

それが餘り痛かつたので、青年記者は一瞬間頭がぐらぐらとした。其の際に

大學生は一跳到車室を横切つて廊下に出て了つた。

あの大学生も共謀者だつたのか？

其の時列車の速度が緩くなつて来た。フアンドールは今起きた事件に尙ほも茫然として、手の傷と自分の前に微かに息をしてゐる肥つた男とを、呆氣に取られて互にみ代りに眺めてゐた。

『まあ好いや、誰だか俺よりも巧くやつた人がある。列車は停つたが、破損をしたやうな氣がする。』

彼の全身に颯と戦慄が走つた。列車の遠力が緩くなるに従つて次第にそれが多くなつて来た。悪漢の見咎められないなど云ふ事は不可能ではあるまいか？
フアンドールは、彼等が逃げる前に、逃げ損ねなかつたものとしても、其の逃走した形跡を残し、車室内で偶然放つた拳銃の弾丸で手應りを残して行くだ

らうと考へた。

そしてジョゼフインは奈何したのか？ あの女は奈何なつたのか？

其の時通路に接してゐる戸口が、かち／＼言ふ音と共に開かれた。フアンドールは若しもジョゼフインの姿が見えたなら、跳りかゝつて行かうと身構へて、耳を澄して窺がつてゐた。

廊下は何だかばた／＼してゐたけれど少しも亂されてはゐなかつた。

悪漢共は急いで走る逃亡者のやうな様子はなく、列車が停つたら早速立去らうとする普通人の急ぐやうに、下車の準備をしてゐた。

列車は尙ほも速度を緩めてゐた。其の間に悪漢共は悠々と喚きもせず、面白さうに高聲で話をしてゐた。

フアンドールは彼等の言葉を聞いてゐた。

『ぼつちりよ……胴巻を信ずるさ……此のやうな事件は神聖な秘蹟だと思はないのかい？……これを引張り廻すのは神様より外には無いせ！』

青年記者は尙ほ聞いてゐたが、今度は其の質問の意味が解らなかつた。

『開封したんだらうな？……』

『何だつて！ ずつと前によ……衝突の時からだあね……』

列車が次第に速度が緩くなつて懸て停車した。

『飛び降りには高いわね？』

フアンドールは其の聲を知つてゐた。ジョゼフィンの尋ねる聲であつた。

『なあに、大丈夫だよ、俺が抱いてやらう。』と誰か直ぐと答へた。

踏段に當る靴の音がした。それで悪漢の逃去つた事をフアンドールは知つた。

ジョゼフィンも彼等と共に立去つて了つた。それではあの女も共謀者であつた

のだらうか？……

それにあの女の言つた言葉は、其の點に一點の疑惑をも投じなかつた。

フアンドールは廊下に跳び出して、悪漢の後を追跡しようとした。

が彼は飛び退つた。

轟然爆發の音が響いたのである。彼の前にあつた硝子が颯と碎け散つて、彼の頭上の廊下の坂張で彈丸が炸裂したのである。

『畜生！』とフアンドールは車室の絨緞の上にびつたり腹這ひになつて吐いた。

『巧く逃れた！ 何をしやあがるか知れたものでない！』

彼は立上りながら考へた。

『ふむ、全速度で退却したな、そしてジョゼフィンも一緒に行つて了つたのだ

な……奴等を追跡する爲めに、俺は全體何を待つてゐる積りか？』

フアンドールは忽ち新しい計畫を立てた。彼等の後から降りて行つて、彼奴等の彈丸に身を曝すのもつまらない、もう一方の反對の側から汽車を降りるとしようと思つた。

決心と實行とはフアンドールの生活にあつては、大凡の場合合致してゐた。で青年記者が其の場を離れようとする、唸聲が聞えた。氣絶してゐた男が次第に正氣附いて來たのである。彼はフアンドールの着物を引張つた。

『どうか助けて下さい、わしの傍を離れないで下さい！』

『何でもありませんよ。治りますよ、快くなります……』

けれどもフアンドールはぎつくりした。ほんの一二秒間停つてゐたばかりで列車は再び動きかけたのである。そこで再び拳銃を發射される危険を冒して、割れた硝子の穴から頭を出して暗夜の中に瞳を凝らして見て、

『オヤ／＼ッ！』とばかり呆れて了つた。

列車はもはや線路の上になかつたのである。もつと解るように言へば、全速力で走る列車の影は遠くに描かれてゐたのである。

唯列車の一片だけが停車してゐたのであつた。フアンドールの乗つてゐた列車と貨車だけが取り残されてゐたのである。

すると此の車は偶然に切れたのだらうか？……否！……それは豫ての計畫であつたのだらう。

此れが悪漢の最後の悪戯だつたのだ……あゝ、美事に行つたのだ。

けれども青年記者を更に驚かすものがあつた。見よ、急行車から切放されたフアンドールの車は、今反對の方へ動いてゐるではないか！

『やつ！ 畜生め！ だがこれは一體奈何なるんだ？』

其の時漸くすつかり正氣附いた肥つた男もフアンドールの方へ寄つて来て、同じく屈んで外を眺めたが、驚いて喚き出した。

『やあ、後戻りだ！ 後戻りだ！』

フアンドールは平然として彼を見成つた。

『成程後戻りだ……坂を降りてゐます……だが……』

肥つた男は絶望して腕をくねらせ、又もや嘆息した。

『それや大變だ！ 十二分するや後からサンブロン急行車がやつて来る！ 若し……』

フアンドールは唇を噛んだ。

今度は彼も恐しい危険の迫つてゐる事が解つた。青年記者は咄嗟に車の外の扉口に行つて、今や焦眉の間に勃發する衝突に會ふよりは手足を折らないで飛

び降りる機會はなからうかと思つて調べてみた。其の時汽車の速力が再び緩くなるやうに思はれた。

彼は注意して見成つた。

さうだ！ 制動機が車輪に軋る音がしてゐた。屹度汽車に縛りつけられてゐた貨車掛が此の逆行を見て同じく驚いたのであらう。そして此れは大變だと云ふので制動機を擱んだのであらう。

全く其の通りであつた。

フアンドールと肥つた男とは自分等二人の残された車から氣配のやうに飛び降りた。貨物車からも同じく二人の鐵道員が飛び降りて来て、大狼狽に泡を喰つて喚き立てた。

『早く逃げた！……早く逃げた！……此處等にゐては危険です！……』

面喰つた一同は、手を擦削いたり、着物を搔裂いたりして、砂利を降り、叢を跳り超え、水の一ぱいある溝などを涉つた。彼等は傾斜した牧場の叢の上を轉がり落ちて、畑地に落ちたなり、地べたにべつたり俯伏して體を固くしてゐた。と轟然落雷のやうな音響が夜の沈黙を破つて轟いた。

サンプロン急行列車は全速力で駛つて来て、線路上に打捨てある二輛の車に衝突し、爆然として跳飛ばしたのである。そして機關車も前部にあつた數輛の客車も破損して了つた！

十四、暗夜の逃走

ルパールは汽車から飛降りるジョゼフインを抱き取るが否や、列車から切放つた車輛の逆行しかけた時、手下の者を勵まし急がせた。

『さあ、行かう！……急いで行かう！……ジョゼフイン、お前も裳をからげて急いでくれ！……』

其の夜は月も無い暗い夜だったので、悪漢共の仕事には都合がよかつた。

ルパールの一團は鐵道線路の土堤を大急ぎで馳降りた……彼等の行手には畑や、葡萄畑や谷などがあつた……其處はコート・ドールの入口であつた。

十五分間程此の兇漢團は一生懸命に走り續けた。ルパールは時々バルビユに尋ねた。

「これが道かい？」

「さうだ、それを行つて行けば好いのだ……」

畑の青黒い中に灰白い筋が浮んでゐるのが、丘の横腹を廻つて遙か彼方の大きな木立の黒い塊の中に融け込んでゐた。彼等は漸く街道を見付けたのである。

「村か？……よし来た！ おい……止まれ！ 四邊を見ろ！……」

ルパールは街道から二三丁此方の坂へ登つて行つて口笛を吹いた。それから彼の傍へ行つて其の命令の下るのを待つてゐた手下どもに言つた。

「仕事は上首尾だよ……甘い汁が吸へた！……けれども悪い事にやまだぐこれでお仕舞ではないのだ……彼奴め、思ひもつかない用心をしてたんだ……」

「否！……其塵事は無い！……」

けれどもルパールは兎や角言ふ事を評さなかつた。

「黙つて聞いてゐろ……まだ仕舞ぢやないのだ、俺たちは一部しか持つてないのだ……分配は明日の晩だ……」

ぶつくさ云ふ不平な聲がした。

「明日の晩だと？ 何だつて明日の晩迄延すんだ？」

けれどもルパールがさう云ふ事を言ふ者の方へぎろりと眼を向けると一同はひとと口を噤んだ。

「明日の晩だ……好いか、それで嫌な奴は來ないだけの事だ……さうすれや外の者がそれだけ徳が行かあ……さあ解散しなければやならないぞ……ジョゼフインとバルビユと俺とは一緒に歸る……俺等には巴里で仕事があるのだ……お前達は附着いてゐちや不可ないから……一人は右へ、一人は左へ行くのだ！……」

此處からパントリユシユ迄は十七八町ある。歸るには明日の晝迄かゝる……勿論廻り道をしないようにするんだぞ……尤も停車場では信號機が閉鎖されてゐるだらう……要するに自分等の好きなやうにやるさ、必要な事は二人附着いてゐない事と、十時頃に巢に戻つてゐる事だ……解つたな？……」

すると大學生、即ちミ、イユに外ならぬ若者が尋ねた。

「何處で會ふんですね？」

「涼しい處で……」

ルパールは立上ると手下の者を打捨て、ジョゼフインとバルビユとに合圖をして歩き出した。

「バルビユ、お前は案内をしてくれ……」

「何處へ行くんだ？」

「電信局へ。」

不平さうな顔をして——彼等は明日の晩迄分配を待たねばならぬのが不満だつたのである——ルパールの手下達は野原で分れ々に立去つた、悪漢團の王と女王と參謀とは街道に出て大股に歩き出した。

バルビユと云ふ男は空想家であつた。

「何の用で電信局へ行くんだね？」

さう尋ねるのも尤もな事であつたけれど、ルパールは怒り出した。

「黙つてろ！……お前迄尋ねるのか？……聞きたくなつたのか？……どんな事があるか推量する事が出来るかい？……」

「どんな事が起きるか？……」

「えい、馬鹿め、俺達が盗まれたんだ……」

「盗まれた？」

「さうだ！……貴様も見たらう、あの酔つた男の紙幣を！」

「いゝや、それが麼何したんだね？ 何か思惑違ひでもあつたのか？」

「半分だつたんだ……此の仕事は間誤々々すると骨折損だ……」

けれどもバルビユの怒るのを面白さうにして、ルパールは好い氣持になつてゐた。

「さう怒るものぢやないや！ また會ふのだもの……半分を二つ合せれや一つにならあね……」

「今度は何處で續きをやるんだか解つてるのかい？……」

「さうともさ……」

「明日の晩其處へ行かうてんだね？」

「其處へ行くのだ。」

「で、それが爲めに電信局へ行くのかい？」

ルパールは拳を握り締めた。

「なあに、明日食ふパンを切りに行くばかりぢやないさ、ジャムをつける爲めもあるのさ!!!」

バルビユが呆れて更に問ねようともせず、黙つて彼を見詰めてゐると、ルパールが繰返して言つた。

「ジャム！……さうだ、而も極上なんだよ！……」

「誰だい？」

ルパールは女達の前で話す事を好まなかつた。彼の傍にはジョゼフインが歩いてゐた、でルパールは自分の參謀にかう答へた。

「誰だ？ ジューヴの奴さ！」

「え、ッ？ 何だつて？……」

バルビユは満足さうな心配さうな、どつち付かすの面持をした。聴て彼は恐る／＼尋ねた。

「成算があるんだらうね？」

「あるよ！……」

「屹度か？」

「屹度だ！」

會話は止んだ。

バルビユはルパールの言ふ事に決して兎や角言つた事はなかつたけれど、此の最後の計畫ばかりは少し心配であつた。ルパールが恐れ氣も無く確信を以て

死を宣した警視廳の名探偵ジューヴ警視は、ルパールが悪漢團中に大首領となつて幅を利かしてゐる程に、悪漢團中に畏怖されてゐたのである。道にバルビユも劔呑な……危険極まる戦争を聯想せずにはゐられなかつたのである……。そしてそれは奈何しようと言ふのか？ ルパールは今しがたも明夜また仕事するのだと言つた。そして今また同日ジューヴを殺害しようと言ふのである……。餘り仕事が多過ぎる……。餘り欲が深過ぎる……。

三人は黙つて歩いた。ルパールとバルビユとは足早に歩いて行つたけれど、ジヨゼフインは忽ち喘ぎ出した。

「ねえ、貴郎、道は遠いの？」

「バルビユに聞いてみるさ……」

「なあに、もう直ぐだよ、エレイ村は此の小山の向ふにあるのさ……」

「國道は何處にあるんだい？」

「ジヴォンの國道かい？……」

「さうとも、カルバントラの國道なんぞ聞きやあしないや！」

「向ふに見えるのがさうだよ……」

「何處？……あの木立の線か？」

「さうく、彼處に人家があるんだよ。」

「さうか……よし、俺はジョゼフィンを彼處へ伴れて行つて、十五分ばかりしたら、お前に追付くからね。そして電報を打たう……」

悪漢と、悪漢が首領と仰いでゐる者との關係を特筆する其の特殊な從順さでバルビユとジョゼフィンは其の言葉に從つた。二人は街道を離れて、野を横切り、巴里ジヴォン間の國道の方へ行つた。

ルバルの連中が犯した大膽な強奪の準備をする爲め、バルビユは三四日前に此の地方へ来て調べたので、此の地方の地勢を心得てゐた……

共謀者は出發した、ルバルは再び自分の道を取つた。彼は用心の爲めに上衣を脱いで、裏を引繰返して着た。上衣には仕掛があつた。裏の方は色合も違つてゐたし、ポケットのついてゐる所も違つてゐた。まるつきり別の服を着たやうに見えるも、其の裏返しで彼を見違へるところ迄は行かない迄も、彼を認めるのは却々難しかつた。

エレイ村の人家にさしかゝつて來ると、小さな酒場が起きてゐた、其處ではもう汽車の椿事が解つてゐるらしい様子であつた。

彼等三人は列車を捨てると廻道をして、畑を横切つて行つた。急行車の運轉手が汽車を切放されたのに氣がついて、停車して何かの處置を講じた場合に、

見咎められない用心から、線路に沿つてゐる道を行くのが望ましくなかつた。で其の廻道の爲めに時間がかつた。エレーに來るとルパールは振返つて見た。小山の上から見ると遙か彼方に赤い火が見えた。時々風に傳つて漠然として混亂した人聲などが聞えて來た。

『巧く行つた、サンプロン急行車があゝの汽車に衝突したんだな……嘸減茶々々になつた事だらう！……』

そしてそれを見極めると、再び行路を續けた。けれども其の時から彼の顔色は暗くなつて、焦燥した、心配さうな様子になつて來た。そして此の眞夜中に眼醒めて、急いで着物を着て、村の街道を急いで救護に行く百姓を呼止めた。

『電信局は何方でせう？……』

彼は百姓に教はつて漸く郵便局に着いた。其處でも女事務員がゐて、矢張り

夢中になつてゐたので、尋ねる事に返事もしないどころか却つて、向ふからいろ／＼な事を尋ねかける位であつた。彼をも列車衝突の遭難者だと思ひ込んでゐたのだらう、ルパールは頼信紙を一枚取つて、それに次のやうに認めた。

パリポナバルト街、百四十二番地

警視廳警視ジューヴ様

萬事上首尾、ルパール一味の者を發見す。強盜行はれたれど失敗。詳細は述ぶる能はず。直ちに解決し得べき事確實、ケスレル屋の附近、ベルシイ税關へ明夜十一時に唯一人來られたし、但し武裝の事。

フアンドール

ルパールは其の文章を満足げに小聲に讀返した。

『好い毘だ、大出来だよ！……』

彼は小窓の方へ近寄つて行つた。そして尙ほかう考へた。

『それに十中の八分迄は、あの新聞記者の馬鹿者奴急行列車に押潰されて了つてゐるだらう……』

女事務員は頼信紙を請取らうとして手をさし伸べた。

悪漢はお世辭たつぷり。

『此の電報を御覽なすつておいて下さい……大椿事だと云ふ事がお解りでムいませう。絶対的に秘密になすつて下さいよ。大切な電報なんですからね……』

女事務員は仰天した。

『畏りました。御安心なすつて下さい。ではあの衝突は此麼悪人から起つた事

なんてですか？ まあ！ 貴方は其の悪者を御存知なんですね？ 貴方は警察の方ですか？

ルパールは一寸會釋した。彼は笑止にも巧みに探偵のやうな態度をしたが、知つてゐても話す事の出来ぬ、黙つてゐなければならぬ規定を嚴守するやうな顔付をして、

『貴女を信用致します……』とだけ言つて口を噤んだ。

そして一寸會釋して郵便局から立出た、と入交りに驛長から呼寄せられた二名の巡查が新しい公電を携へて入つて來た……

十分間も足早に歩いたルパールは、聽てジョゼフインとバルビユとの傍にゐた。共謀者二人は國道に彼を待つてゐた。

「おい、變つた事は無かつたかい？」

「無かつた！」

「ジョゼフィン！ 此れから一町ばかり先へ行つて、見付かり次第の自動車に怒鳴るんだ！……助けてくれ！ 人殺し！ と怒鳴るんだ！……すると自動車が速力を緩めるだらう……解つたね？……ではお行で！……」

「だつて、貴郎……」

「好いからお行でと云ふのだよ……愚圖々々してゐちや不可ない。お前も此の土地に根を据ゑる積りぢやないのだらう？……すれば……」

女は服従しなければならぬ事を知つて、致方無く立去つた。

數分間経つた。ジョゼフィンが街道を下つて、寺の片蔭に隠れる姿をバルビユもルパールも見つた。

「お前の拳銃は大丈夫かい、バルビユ？」

「あゝ、六發あるよ。」

「よし……それぢや貴様は右へ行け、俺は左だ……」

ルパールがさう言ひも終らぬに、遙か水平線の方に一つ強い光が現はれて、刻一刻大きくなつて來た。それと共にモーターの響が寂然たる夜の田野にはつきりと聞えて來た……

ルパールは打笑つた。

「おい、バルビユ、あの火を見ろ……アセチリンの灯ぢやないか……あの車が此方へ來て巧く俺達を助けてくれるぜ。」

事實一臺の自動車が多々此方へ近いて來た。併し其の自動車がジョゼフィンの隠れてゐる邊を通らうとする時、ルパールの情婦は裂くやうな悲鳴を擧げて

街道へ飛出した。

『あれえ！ 助けて！……助けて！……お頭です！……車を停めて下さいよう？……』

運轉手は人氣も無い深夜の街道の上に忽然と飛び出して来た女の姿に驚いて早速制動機を摑んだ。其の間に其の車の中から一人の客が起上つて、外へ首をさし出して窺つた。

『何だ〜？ 止めろ！』

ジョゼフインは車の方へ尙ほ馳けて来た。自動車は制動機に締められて次第に速力を緩くした……そして今や停車ししようとしてゐる所へ、暗い街道の兩側からルパールとバルビユとが跳り出して来た。

『貴様は客……俺は運轉手だ！……』とルパールがバルビユに叫んだ。

二人は踏段へ跳り上つた……

バルビユが客の喉を締める間に、ルパールは手を振つて運轉手の動くのを禁じた。

『一寸も動くな！……でないと撃殺すぞ！……』

そして三秒間でルパールとバルビユとは對手を嚇して、其の額に拳銃の筒口をさしつけてゐた……

『ジョゼフイン！ 此奴等を縛つてくれ！……』

ルパールはポケットからはみ出してゐる細引を情婦に示した。

『足！……手！……』

そして二人を縛りあげて了ふと、用心の爲めにルパールは猿轡を嵌めてバルビユに言つた。

『ジョゼフィンも乗れ！……バルビユも乗れ！……』
 ルパールは全速力で疾走させた。
 『もうパントリユシユだぞ！ 此の車はよく走るが、投げ出さねばなるまい。餘り呑みだからなあ……』
 そして一寸黙つてゐたが、聴て齒を喰緊つて、獨言でも言ふ様に、
 『俺等二人でジュウダ！……』と低い聲で呟いた。

『此奴等を道傍へ打遣つとけ……もう、一町ばかり畑中へ伴れて行つて、見付かる迄に相當時間のかゝるやうにしておけ……』
 『殺して了はないのか？』
 ルパールは躊躇した。
 『ふつ！……其麼面倒をかけるでもあるまいよ……併し？……うむ！ 半殺しにしておけ……バルビユ、其の顔を三つばかり蹴つておけ、直ぐとは起上かられないように……』
 ルパールは自動車に乗つて、巧みに方向を轉じた。
 『好いか？』と彼は手下の方へ戻つて來て尋ねた。
 『好いよ……一寸手酷かつたかも知れない……もう足も手も動かさないや。』
 ルパールは悠然たるものであつた。

十五、サンブロン急行車の椿事

ルパールと其の共謀者とが列車を切放して、坂の上から逆行する前の一瞬間を利用して、夜の田野を走つてゐる一方、大惨事件が擡つた。

軌道の曲る所で、全速力のサンブロン急行車は、大椿事の一刹那幸ひにもフアンドールの逃げ出した二輛の車に衝突した……

汽罐車は轟然と物凄い大音響と共に衝突して二輛の車を粉碎した。そして汽罐も猛烈な激突の勢で、馬が後足で立つやうに棒立に突立つたが、再び落ちた時には脱線して、其の後に聯結してあつた一輛の貨車と二輛の客車とが顛覆して了つた。

恐怖と驚きの爲めに口も利けなかつたフアンドールや他の同乗者達は、自分

等の數歩前へ、寢臺車が地響打たせて倒れるのを見た。

忽ち寂然たる夜の田野は一大修羅場の出現したやうな大騒ぎになつた。絶え入るやうな呻吟、恐怖の悲鳴、其の椿事に驚いて車から夢中に馳け出す人々――彼等は心地よく熟睡してゐる所を、寢耳に水のやうな騒ぎで、惶てふためいて一目散に馳け出したのである。

最初は驚きの餘り茫然としてゐたフアンドールも、聽て立上ると一目散に椿事列車の方へ飛んで行つた……

汽罐車と、石炭の山と、方々からシュウ／＼と吹出る蒸汽の雲を被つた破片の中から、二人の男が、血塗れになつた運轉手と火夫とが半狂亂の態で、よろ／＼と出て來た。

フアンドールは其の方へ飛んで行つた。

十五、サンブロン急行車の椿事

ルパールと其の共謀者とが列車を切放して、坂の上から逆行する前の一瞬間を利用して、夜の田野を走つてゐる一方、大惨事件が擡つた。

軌道の曲る所で、全速力のサンブロン急行車は、大椿事の一刹那幸ひにもフアンドールの逃げ出した二輛の車に衝突した……

汽罐車は轟然と物凄い大音響と共に衝突して二輛の車を粉碎した。そして汽罐も猛烈な激突の勢で、馬が後足で立つやうに棒立に突立つたが、再び落ちた時には脱線して、其の後に聯結してあつた一輛の貨車と二輛の客車とが顛覆して了つた。

恐怖と驚きの爲めに口も利けなかつたフアンドールや他の同乗者達は、自分

等の數歩前へ、寢臺車が地響打たせて倒れるのを見た。

忽ち寂然たる夜の田野は一大修羅場の出現したやうな大騒ぎになつた。絶え入るやうな呻吟、恐怖の悲鳴、其の椿事に驚いて車から夢中に馳け出す人々――彼等は心地よく熟睡してゐる所を、寢耳に水のやうな騒ぎで、惶てふためいて一目散に馳け出したのである。

最初は驚きの餘り茫然としてゐたフアンドールも、聽て立上ると一目散に椿事列車の方へ飛んで行つた……

汽罐車と、石炭の山と、方々からシュウ／＼と吹出る蒸汽の雲を被つた破片の中から、二人の男が、血塗れになつた運轉手と火夫とが半狂亂の態で、よろ／＼と出て來た。

フアンドールは其の方へ飛んで行つた。

「おゝ！……おゝ！……」

生きてゐる人間を見ると、彼等二人は恐しい悪夢から覺醒した。

機關手は血だらけの折れた腕を青年記者の方へさし出した。

そして殆ど聞えぬ程の微かな聲で、

「後生ですから助けて下さい！……助けて下さい！」

フアンドールが其の肩に手をかけると、進出した蒸汽の爲に大火傷をしてゐるのを概はず彼を坂道へ引張つて行つて、此の勇敢な機關手はかう言つた。

「あの嘴管を開けて下さい！……其處、其の曲つてゐる管です……其れを擧げて下さい……さ早く……汽罐が破裂してしましますから……」

フアンドールが再度の椿事を防ぐ爲めに、尙ほ其の仕事に携はつてゐると、危難を逃れた旅客達や汽車の破片に押潰されて悲鳴を擧げてゐた負傷者で、忽ち

ち救護隊が編成された。

火夫は機關手よりも傷が淺かつたので、唯一人て今は焰を揚げてゐる碎けた汽車の中から抜け出す事が出来た……

車掌だの、列車の後部にある、僅かに衝突と知つた旅客達も馳けつけて来て、混亂を極め乍ら負傷者を探したり、其處此處に、ボーボーと嫌な音を立て、ガス貯藏器の吹き出す燃焼性の空氣の端に起る火事を消したりした……

併し列車から逃げ出した者達は、息咳切つて土堤の下の道を直走りに走つて……エレイ村に行つて警報を傳へた……今迄静かであつた村は忽ち騒然として殺氣立つた。提灯だの炬火だのが急いで點せられる。十五分ばかり大騒動をやつた後、四方八方から救援が來た。

車掌がまだ恐怖の醒め切らぬ調子でフアンドールに言ひかけた。

「此の衝突が速力の弛んでゐるカーブなんかでなかつたのがせめてもの幸せでしたよ……貴方……十分前だつたらそれこそ列車全部顛覆して、誰一人助かる者はなかつたらうと思ひますよ……」

「さうですねえ、せめてもの幸ひでしたよ。」

と青年記者も汗や石炭の灰に塗れた顔を手巾で拭ひながら答へた。「……機關手や脚を折つて今運ばれて行つた婦人を除ければ、他に重傷を受けた人は無いやうですね……衝突せられた二輛の車は殆ど空だつたのでせう?……」

「え、殆ど……」

樁事は電達された。驛では其の電信に驚いて、救援車を仕立て、一時間以内に現場に派遣すると返電した。

フアンドールも大いに活動した。非常に駭き狼狽したたけれど、忽ち冷靜に

返つて、崩壊列車中を搜索して負傷者を助け出す救援隊に真先に手傳つたうちの一人であつた。

けれど救援者も今は多數になつたので、もう殆ど荷物の始末をしたり、バリーの急行車を通過させる爲めに軌道上を取片附けたり、首府から朝の列車で来る旅客を通過させる爲め、積換をする事にした。

フアンドールはすつかり疲勞して了つたので、暫時休息して、考へたり、思案したりする爲めに横になれる場所を求めながら、樁事の場所を離れた……

彼が土堤に沿つて二三間行くと、一人の肥つた男が『もし〜!……』と呼びかけながら、大息しつゝ自分の方へ馳けて来るのに氣がついた。

「え?……」

「酷いめに會ひましたなあ?……」

フアンドールは其の男が昨夜同車した男で、盜賊に追剝せられ胴巻を奪はれたジョゼフインの旦那である事を認めた。

慘事に出會つてからは、僅かな金錢の問題などは打忘れて了つてゐたけれども、かう言はれると彼もそれを迎へた。

『やあ、だが巧く助かりましたね！ 祝をしても好いですよ……だが奥さんは奈何なさいましたらう？……』

勿論奥さんと言つた所で、フアンドールが欺かれてゐるのではなかつた、唯對手に一寸探りを入れてみたゞけの事であつた。

併し肥つた男の顔は忽ち悲痛な絶望の色に變つた。

『私の妻ですつて？ あゝ貴方、あれや實に大事なんですよ！ あれや私の妻ぢやないんです！ その……女友達なんですがね……此處椿事になつては私の

妻に、私の本當の、愛する妻に何もかも解つて了ふだらうと思ひます、すると私は不貞な男になるんです！……あゝ！……私は一緒に伴れてゐた女を愛してゐたのですが……奈何なつたのかそれすら解らないのです？……』

『奈何して御存知ないんです？……』
ふゝむ、すると此の男はジョゼフインが泥棒の共謀者であつた事に氣がつかなかつたのだらうか？……

『えゝ、知りません！ 貴方も私の泥棒されてゐる所を御覽でしたせう？……私は頭が一寸奈何かして了つたんですね……あれの行方が皆無知れないんです……悪い事には私があつた女を知るやうになつてから、たつた十五日程しかないんですよ！ 巴里では一度しか會つた事がないんです。ふとした事から此の旅行の話をして、リイヨン停車場で待合はす事にして此れ迄来たのですが